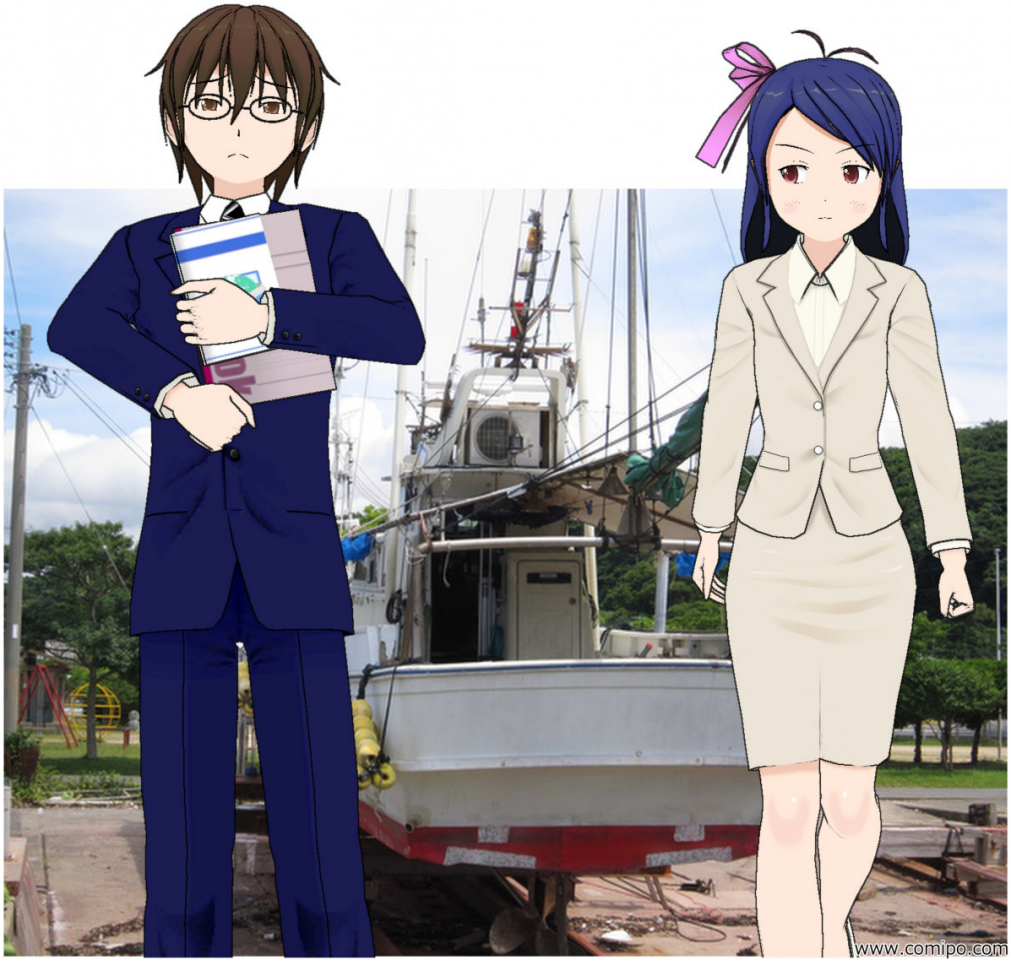
青年作家
と
第五十六幸福丸

黒川 文



目次

青年作家と第五十六幸福丸
はじめに 3

1.
1. 7

2.
2. 13

3.
3. 19

4.
4. 25

5.
5. 31

6.
6. 37

7.
7. 43

8.
8. 47

9.
9. 53

10.
10. 59

11.
11. 65

12.

12. 71

13.
13. 77

14.
14. 81

15.
15. 87

16.
16. 91

17.
17. 97

18.
18. 103

19.
19. 107

青年作家と第五十六幸福丸

はじめに

＜あらすじ＞
主人公の杉原慎二は文士気取りで大学卒業後も就職せず、アルバイトで生計を立てながら小説ばかり書いていた。大学時代の同級生である恋人の裕子は彼が就職するようせっせと働きかけていたが、本人には一向にその気はなく、作家になることを夢見てせっせと原稿書きに没頭していた。しびれを切らした裕子は慎二に知り合いの会社を次々と紹介し、面接させるが.....。やっと決まった職場も、結局、会社員生活になじめず、辞めてしまう。

1.

1.

　慎二が原稿用紙に向かっていると、あまりの暑さに額からポタリと汗が落ちた。インクが滲《にじ》んで、原稿用紙にみるみるうちに染みが出来た。慎二は慌てて吸い取り紙を原稿用紙に押し当てて、それを食い止めようと試みたが無駄だった。
「あーあ、ついてねえや」
　八月の暑いさなか、モルタル二階建て西向きのアパートの中は日暮れ過ぎても摂氏三十度を超え冷房もない部屋でいると三十分もしないうちに汗だくだった。慎二は使いものにならならくなった一枚の原稿用紙を手のひらでクシャクシャに丸めるとゴミ箱に放り込んだ。
　アパートの鋼製階段を上がってくるハイヒールの音がした。と思ったら、不意に鍵のかかっていないドアが開いた。恋人の裕子だった。
「こんばんは。どうかしたの？」
「何が？」
「慎二君、何だか機嫌悪そうよ。帰ろうかな」
　裕子はおどけて言った。
「待てよ。そんなんじゃない。原稿用紙の上に汗が落ちて滲んじゃったんだ。それだけだ。別に行き詰まっていた訳じゃないさ」
「まあ、どうでもいいけど。おかず買ってきたわよ」
「ああ、ありがとう」
　慎二が、キッチンの床に置いてある炊飯器を見ると、夕方タイマーを入れておいたものが、炊けて保温に切り替わっていた。立ち上がって冷蔵庫を開け、缶ビールを取り出すと、裕子にも勧めた。
「裕子も飲む？」
「ううん、おうちに帰って食事しなくちゃならないから。それに慎二君のこと両親にも話してないもの」
「あ、そう」
「それに、執筆に差し支えがあるなら、ワープロソフトを使えばいいのに」
「ワープロだと使いたい漢字が一回で出ないし、それに表現が画一的になるような気がして嫌なんだ」
「そう」
　裕子は何か言いたいことがあったようだった。慎二は裕子が夕食に付き合わないとわかると、ビールを冷蔵庫に戻して受け取ったおかずをテーブルにしている台の上に置いた。後で一人の食事だ。

「あのね、うちの取引先の会社でね.....」
「また、就職斡旋してくれたの？」
　慎二は迷惑そうに聞いた。
「そんな嫌な顔しないでよ。こっちも頼みづらいところを、わざわざ話を持って行ったんだから。それでね、あちらの社長さんに慎二君のこと話してみたの。講立大学出身で今、就職先を探してるって」
　慎二と裕子は講立大学の同期だった。この大学は文系では結構優秀な方で、経済界に多くの卒業生が活躍している。それで裕子も相手に売り込むのに大学の名前を出したのだろうと思った。
「その会社って、小説書いててもいいのか？」
「勤務時間外ならいいんじゃないかしら」
「とぼけるなよ。俺が作家志望と言うことは内緒にしてるんだろう？」
「当たり前じゃない。非現実的なことに人生を賭けるなんて馬鹿じゃないかと思われるだけだよ」
「俺は、今の生活でいいんだよ。いつかは俺の小説が認められると信じているし、生活費はアルバイトで何とかなってる」
「いつまでその生活を続ける気？　　あたしもいつまでも付き合えないよ.....」
　裕子の目が涙ぐみ始めた。慎二が何か言おうとするのを遮るように大声で怒鳴った。
「もうっ！　　もっとまっとうな人生設計考えてよ！　　あたしの立場もないじゃないの！」
　そう言い残し、バタンとドアを閉めて出て行ってしまった。アパートの階段をハイヒールで駆け下りて行くのが、カンカンカンと言う足音で分かった。
　彼女は世田谷に住み、日暮里にある会社で働いている。慎二のアパートは池袋の駅に近いので、ＪＲ山手線を途中下車して寄ってくれているのだ。

　杉原慎二と中野裕子が知り合ったのは池袋近くにある講立大学の一年生の時だった。一般教養の講義で現代文学論を受けたときに、席が隣になり慎二から声を掛けた所、彼女は笑顔で接してくれた。そのうち、慎二がさぼったときに彼女がノートを貸してくれるようになったりし、夏休み頃にはすっかり親しくなっていた。その頃は慎二は法学部、裕子は経済学部にいた。
　実際、慎二は優秀な方だったと、今では後悔半分に思っている。
　司法試験の予備試験の一次を受けたくらいだ。当時は本気で法曹への道を歩む気でいたし、裕子もそんな慎二に期待していたのか、かなり本気で付き合っていた。

　しかし、間もなく転機が訪れた。法律家への道を進むことに疑問を感じ始め、そんなときに受けた現代文学の講義で、今の今まで興味もなかった文学に目覚めたのだ。目標は芥川龍之介と志賀直哉。自分でもあのときは本気で「出来る」。そう信じていた。

その後、前期の講義が終わっても、熱が冷めず、色んな文学作品を読み漁る様になり、慎二はそのうち自分で小説を書き始め、三年生になったとき、裕子が反対するのにもかかわらず、文学部に転部してしまった。慎二は現在二十五歳になるが、二十歳のときに初めて書いた小説を新人賞に応募して落ち、それからも受賞したことはない。

裕子は順調に優秀な成績で卒業し、中堅商社の荒川物産に就職した。現在は経理課に勤めている。総合職で三年目となれば結構重要な仕事も任され、慎二のことがなければ一番楽しい時期でもあるはずだった。

裕子が経済学部一年生グループのコンパで、夜遅くまで飲んで帰ろうとしたとき、つぶれてしまったことがあった。彼女たちの中で付き合っていると知られていたのだろうか、近くの友人と言うことで池袋のアパートに住んでいた慎二が呼び出され、彼女と友人が付き添い、そのまま自分の部屋に連れて帰り介抱していた。

そのうち、一緒に付いてきた裕子の女友達は帰ってしまい、慎司は裕子と二人っきりの一夜を過ごした。

草食男子であり、慎ましやかな性格だったので、なんら淫らなことはしていない。それだけは、ビールを飲んでいてもはっきり覚えていた。翌朝、裕子は二日酔いらしく、この部屋にあった頭痛薬を飲んでそのまま帰っていった。しかし、周囲の友人たちは、二人の関係をステディなものと解釈する様になってしまった。

講義のとき、席が空いていなくても、二人で近づくと、さっと二人分譲ってくれたりと言った態度である。――卒業したら結婚するの？　と、訊いて来た女子もいたほどだ。

裕子とは最初に出会った日から変わることなく、親友であり、あるいはそれ以上の関係でもあった。

2.

2.

大学を卒業し、慎二は就職せずに小説を書き続け、生活費は駅前のコンビニで夜間のアルバイトをし、朝仮眠をして午後からの数時間を執筆に当てるといった生活をここ三年間続けている。

慎二が原稿用紙に万年筆のスタイルで執筆を続けるのにも、彼女に言ったような大層な理由ではない。最初に文学に目覚めたときに受けた、昭和の文豪スタイルにかぶれただけである。確かに、パソコンを使うのに比べ喫茶店でもファミリーレストランでもどこでも執筆できるメリットはあったが、実際には慎二は冷房のない.....クーラーはあったが電気代節約のためコンセントは抜いていた.....自分の部屋以外で執筆することはなかったので安いデスクトップパソコンを買った方が、原稿を応募する出版社の人にとっても読みやすかったに違いない。だが、慎二が小説のエンドユーザーは読者であって出版社ではないという考えに凝り固まっているのも事実だった。

裕子が飛び出していった後、慎二は買ってくれたおかずと炊飯器のご飯を食べた。ビールは飲む気がしなかった。

――あたしの立場も考えて、か。

慎二は裕子の気持ちを分かってはいた。慎二自身、早く文壇デビューを飾って彼女にプロポーズしたい気持ちもあったし、多分、裕子もどうにか格好をつけて、この不安定な関係に終止符を打ちたい気持ちもあったのだろうと解釈していた。もし、自分がこのままくすぶって、彼女を他の男にとられたら、それこそ立ち直れないような気がしていた。

今、慎二が書きかけの小説も、今まで何百作と書いてきたうちの一作に過ぎないが、七月末に発送した分も少し自信作だったし、これも、少しは自信があった。

だが、その自信も根拠のない自信だった。分かってはいるが認められない。その踏ん切りをつけさせるために、裕子はここしばらく頻繁に慎二のアパートにやって来ているのだ。

「悩みが尽きないな」

慎二は冷蔵庫を開け、さっきやめたビールの蓋を開けた。プシュッと言う音をたて泡が指に飛んだ。一回アルコールが入るとしばらくの間、文章が書けないことは経験上分かっていた。なのに飲むのをとめられなかった。缶を一本空けるともう一本取り出した。

　裕子の持ってきたおかずを肴に三本飲んで、ごろりと横になりそのまま居眠りしてしまった。冷房がないので風邪を引く心配はないが、唯一の仕事である執筆がストップしてしまう。プロの作家を目指している割に自制心に欠けていた。

　慎二が居眠りをして九時半時頃、突如、彼のスマホの呼び出し音が鳴り響いた。――今日はコンビニのシフトが入っていなかったはずだが。と、朦朧《もうろう》としながら起き目覚まし時計と勘違いしてボタンを探したが、アラームの音はこれではなかった。裕子からの電話かなと思い、スマホの通話ボタンを押した。
「裕子ですけど。出るのが遅かったけど寝てたの？」
「い、いや、執筆に没頭していた。さっきは悪かったな。一方的に拒絶したりして」
「ううん。それで前向きに考えて欲しいのよ。いいかしら？」
「あ、ああ、就職の件だったな」
「やっぱり真剣に考えてないでしょ？」
「どうして」
「だって、普通就職の話なら待遇とか、給与、年間休日その他諸々、質問事項があるはずよ。どんな仕事するのかとか。なのに、慎二君。本当に前向きに考えてる？　　それだけ？　　本気で考えてないでしょう？　　あたしがうるさく言うもんだから一回会ってみて断ろうって。違う？」
「あ、うう.....」
「あのね。参考までに教えてあげるわ。相手先は共和精密工業という会社。年商百億の機械部品メーカーで、精密機械部品を中国に輸出している。間にはうちが入ってるけどね。海外では作れない精密部品を出荷しているの。給与は二十五歳時点で二十五万円と賞与が二・五ヶ月。休日はカレンダーの赤い日の通り。福利厚生施設はないわ。仕事はそこの経理担当で、輸出入によるドル建てや元建ての支払いを円に直したり、帳簿をつけるのが仕事。今、決済がドルからユーロになったり人民元だったり、ルーブルだったりしてややこしいらしいの。それで大卒の優秀な経済に明るい人が欲しいみたい。慎二君行ってみない？」
「俺には勤まりそうにないなあ」
　慎二は投げやりに答えた。
「もう、いい加減にどこかに就職しなさいよ。それで老後に余裕があれば小説書けばいいじゃない。最近流行の本見たことある？　　本屋さんで？」
「いや、そんなもの読まない」
「だったら、教えてあげるわよ。売れてる本は古い人ばかり、新人賞と銘打った作品は少し特殊な存在よ。わかってる？」
「何が言いたい？」
「だから、新人賞応募なんて馬鹿げたゲームから降りてもらいたいの」
「それで、何とか工業の経理の仕事か？」
「別に一生そこにいる必要もないのよ。結婚した後、もっといい条件の仕事があれば転職も可能だし.....でも、今は慎二君には手に職がないでしょ？」

「手に職？　資格のことか、確かにないな。万年筆にインクを補充するくらいだ」
「だから、最初のスタートとしては出遅れたけど、ここがいいと思うの。社長もいい人だし、慎二君のこと、きっと目に掛けてくれるわ」
「そうだな」
　実際、慎二は裕子ほど深く社会情勢を読んでいなかった。一方的ににまくし立てられて、何となく返事をしているが、正直、興味はなかった。仕事をするのが嫌なのではなくて、サラリーマンとしてどこかに縛られるという、その行為が嫌だった。
　孤高、と言えば聞こえがいいが、今流行の言葉で言うところの引きこもりだ。

　裕子は更に責め立てた。
「聞いてるの？」
「あ、ああ、聞いてるよ。ばっちり」
「うそばっかり。だったら、今週の金曜の午後でどうかしら？　場所は日暮里駅下車徒歩十分。背広は持ってる？」
「背広、せびろせびろねえ……あったかな？」
　社会にコミットしていない慎二に背広などあろうはずがなかった。
「ないの？」
「大学の卒業式のときに作った気がするんだが……あれ駄目かな」
「自分でどう思うのよ。どんなのだっけ？」
「濃いブルーのスーツに淡い紫のシャツ、ネクタイは鮮やかな青のストライプだったな」
　慎二は卒業式の後、裕子達と仲間で撮った写真を見て答えていた。
「就職の面接にそんなの着ていく人いないわよ。紺の背広はないの？」
「だから、持ってるのはさっき言ったやつだけ。以上です」
「慎二君、まさかあたしがせっかく探してきた仕事を、背広のせいにして断る気じゃないでしょうね！」
　裕子の声がきつくなった。
「おいおい、まるで俺が子供みたいな扱いじゃないか。どこかで調達するよ」
　慎二は口から出任せを言ったが、大学を出て三年。早くもそんなものを貸してくれる友人に心当たりはなかった。
「念のため聞いておくけど、誰か貸してくれる人いるの？」
「これから探すよ」
「駄目よ、時間がないじゃない。慎二君、身長一七五センチくらいだったわね。ウエストは？」
「七十五センチくらいかな。ジーパンのサイズと同じかな？」
「ちょっとくらいなら、バックルでサイズ調節がきくのあるから。あたしのお父さんのを借りるわ。今夜、家の前まで取りに来てくれる？」
「今から？」
　慎二が時計を見ると、午後十時だった。彼女が届けるにしては遅い時間だし明日の朝にしても、そんなものを持って通勤するのも怪しげだ。
　面倒だったが、取りに行くと答え、出る準備をした。着いたら彼女のスマホに連絡し

たら門の外まで持って行くと言うことにした。慎二がドアを開けるとむっとした空気がまとわりついた。冷房がないとは言え、東京の外の空気はかなり暑い。とぼとぼとＪＲ池袋駅に向かい、新宿までの切符を買った。改札を通り、丁度来た電車に乗り込むと、会社帰りだろうと思われるサラリーマンやＯＬで一杯だった。丁度十時過ぎと言えば多い時間だ。

楽しそうに生きているサラリーマンなんていないし、女性も同様だ。週末これから飲みに行くのならいざ知らず、楽しいわけがない。

ふと見ると、慎二のいるのと反対側の席には面白くなさそうな顔で大股を広げて座っているおじさんがいた。アルコールが入っているらしく赤い顔をして仕事の愚痴をこぼしている。周りに立っていた女性はさりげなく場所を移動した。絡まれたらかなわない。

慎二はそんな電車の中の社会の縮図を見ながら考えた。裕子の言うとおり最初は自分に出来る仕事からスタートして、それがマスターできたら社内で別の仕事に取り組んでもいいし、給与条件のよい別の会社に移ってもよい。少なくとも裕子が勧めてくれる道を進めば社会の負け組に入ることはなさそうに思えた。

3.

3.

新宿駅で慎二は小田急線に乗り換え、十分ほどで下北沢に着いた。前に一度、裕子の両親がいないときに遊びに行ったことがあった。住宅地の中をしばらく歩き、彼女の家の門の前から裕子のスマホに電話した。

「あれ、もう着いたの？　ちょっと待っててね」

五分ほど待たせて彼女が出て来た。部屋着から着替えていたようだった。手には荷物を持っている。

「これが、お父さんの背広。普段使ってないやつだから、すぐに返さなくていいよ。スラックスは腰にバックルが入ってて調節できるからね。それから、これが先方の名刺と会社のパンフレット。金曜日の十三時に受付に行って、人事課の秋山さんという人に会ってくれる？」

「わかった。秋山さんね」

「秋山さんは単なるスタッフだからね。慎二君が売り込むのは社長さんなんだから、気をつけてよ」

「わかったよ、背広ありがとう」

そう言って、もう遅いので慎二はまた来た道を帰った。

だが、帰りの電車内のサラリーマン達は時間的に遅い組なのか、もっと荒んでいた。会社のために懸命に働いても認められないどころか、来月のリストラリストに載ってしまうのだ。理不尽な世界でもあった。

サラリーマンの幸せは結局のところ経営者次第なのだ。利益計上のために簡単に社員を解雇するような会社にいたらたまったものじゃない。だが、ほとんどの株式会社は会長も社長もサラリーマンなのだ。赤字など出したら株主さまから責任を問われるから、国家百年の計を案じて経営に当たった戦前の財閥経営者とは根本的に異なる。

慎二は金曜日の朝、ぼけーっとしていた。

前日のアルバイトは無理を言ってシフトを変えてもらった。

裕子の熱心さに負けて折れてしまったが、サラリーマンが本当に安定しているのだろうか疑問に思っている。一昔前なら、役に立たない社員は宴会部長だの窓際族だの言われ、社内に飼い殺しになってはいたが、今時の会社ではとっととリストラ対象になり、ハローワーク通いをしているのだ。仕事の出来ない社員を抱えるような余裕は日本企業には最早ない。

かつて、詰め込み教育をうけた世代は、自殺しそうになるまで会社に貢献しながらも、最後はリストラされて大いに苦労しているようだが、個性偏重《ゆとり》教育の世代は、そんな会社に無理に入ることに魅力など感じないし、社会的に役に立っていないことに罪悪感など感じない。だから、孤高と言う言葉で自分を守り、社会からはじき飛ばされるような失態から自らのプライドを守っているのだ。そう言う意味では引きこもりも悪くないと思っている。

そうした生き方が流行しつつあるのだが、政府はこれを引きこもりやニートと名付け、社会対策の対象に位置づけてしまった。だが、バブル経済崩壊以後の経済政策上の失策と言われる空白の三十年と、文部科学省が二十年周期で繰り返す、個性偏重教育と詰め込み教育の間で咲いた、時代のあだ花なのだ。

自己防衛のためのライフスタイルなのだから、下手な対策を打てば、この数十万人の若者が自殺の予備軍になっていただろう。

慎二の未来は、本人には何となく見えている。会社に入って単調な帳簿の処理だけなら、無意識に指先を動かしているだけでいいだろうが、今時、クリエイティブな人間でなければ会社はその人を必要とはしない。近い将来リストラリストに名を連ねることになるだろう。だが、三〇歳を過ぎてから失業するのは御免だと思った。

十二時に食事を済ませて、ＪＲ日暮里駅を降りパンフレットにある道順通りに面接先に向かった。断ろうと思いつつも、行きもしなかったのでは裕子が怒るだろうと思ったからだ。

受付で人事担当者を呼び出すと、一旦人事課で簡単な挨拶をさせられ、これまでの経歴を聞かれた。慎二は正直そのまま作家志望で活動中と答えた。秋山という担当者は苦笑しながらも、慎二を社長室に案内した。

社長室は重厚な作りで、いかにもワンマン社長という感じを受けた。名刺をもらった。山本八之助と書いてあった。

「はじめまして、杉原慎二です」

「山本です。どうぞお掛け下さい」

「失礼します」と慎二はお辞儀をしてから、ソファに腰掛けた。

「杉原さんとおっしゃいましたな」

「はい」

「工業製品の値段を御存知ですか？」

山本社長は意外な方向から攻めてきたと思った。

「は？　いいえ」

「ふん。大体、鉄工所の製品で一トン百万円以下です。ですがそんな仕事は三十万くらいで現在外国にとられていて、もう日本では成り立ちません。ですが、この会社の製品は一トン五百万から八百万の製品を作っています、簡単な加工品からは撤退し精密工業に生まれ変わった結果です。それでも安いでしょう？」

　安いと言われても慎二にはぴんと来なかった。
「スーパーで言うと百グラム五百円から八百円の商品です。牛肉と同じくらいと思って下さい」
　そう説明し、山本社長は鷹揚《おうよう》に笑みを浮かべた。余裕を感じさせる態度だった。
「あの、その百グラムいくらとか言うのと僕の仕事と何か関係があるのですか？」
「はは、ぴんと来ない人は製造業には向きません。それだけです。例えば、重量が大きいほど人手と手間が掛かる。それ位は分かりますね？」
「はい」
「じゃあ、一トンの製品を製作するのに、何人雇えるか。逆に今何人雇っているから、今年はどれだけ受注しなければならないか。少なければトン当たりの製造単価を上げられないか、それを常に考えなければなりません。割り込めば赤字計上するか、誰かを首にするかです、経営者にとってはどちらも辛いことです」
「あの、今ひとつ分からないのですが？」
「君のことは荒川物産の担当者から紹介されています。経理の担当者として雇ってくれと言われています。それで、経験が浅いと言うことも聞いています。後は君に適性があるかどうか、それだけが知りたいのです」
「経理の重要性を認識しているかどうかですか？」
「そうです、単に帳簿をつけるだけではない。常に財務状況を把握し、負債を増やすのか減らすのか、設備投資をするかしないか、決めるのは経営陣ですが、判断資料を提示するのは経理課長です。一般に一人雇用するのに一億の売り上げが必要です。今後、ユーロが上がってくると、売り上げを伸ばすのにユーロ建て契約を増やすことも考えないといけないしそれを営業に指示するのも経理の仕事です。このバランス感覚がないと辛いです」
「あの、経理課って昔からそんなことしていたんですか？」
「いいえ、大手の下請けだった時代には、単なる帳簿付けと、お金の払い出し係でした。不況時代の生き残りを懸けた改革の結果産み出されたのが、能動的な経理です。大手企業では経営企画室と呼んでいるところもありますね」
「なるほど」
「それで気になったのが、人事課長からのファイルで君が作家志望となっていたのですが、これは新手の冗談ですか？」
「いえ、もともと作家志望で今も原稿を書いています」
「確かに製品単価は高いと言えるでしょうね。でも売れてるの？」
　少しばかり社長の口調が変わったのに気づいた。
「いいえ」
「趣味で週末に何をしてもらおうが、それは、大いに推奨するけど、仕事に差し支えるようだと、業務命令で止めてもらうこともあり得るけどそれは、理解していますか？」
「平日には作家活動はするなと？」
「そう。それに、売れたからと言って急に辞められても困るんですよ」
「今のところ、新人賞への応募をしていますが受賞歴はありません。今後のことは分かりません」

「書き続けるの？」
「そのつもりです」
「分かりました。結果は追って人事課長からお伝えします。ですが、今の出版業界を見ているとねえ.....」
　裕子と同じことを言う気かと思った。
「例えばね、百万円の機械があるとする。自動車でもいい。これが売れたとしよう。気をよくして同じものを市場に投入したらどうなると思う？」
「わかりません」
「頭を使いなさい。一台も売れないよ。だから、二割引、三割引してまで処分するんだ。百万円の価値を維持したかったら、性能をよくしたり付加機能をつけることが絶対に必要だ。出版物でそんな試みがあるかね？」
「ないでしょうか？」
「現在市場に出ているのは、わたしが若い頃デビューした作家ばかりじゃないか。それ以外にいるかい？　　漫画以外で？」
「例えば.....」
　慎司は答えに窮した。社長の質問以前に、現在の文学界の事情も知らなかった。
「因みに日本の出版業界の経済規模は？」
「知りません」
「１兆６千億程度だ。これを大きいと見るか小さいと見るかで答えは変わるが、この程度の売り上げを一社で上げている企業もいくつかある。と言うより結構あるんだ。大の男が人生を賭ける土俵ではない。ちょっとは勉強しなさい」

　言いたいことを言われ尽くした感じで、慎二は日暮里駅の改札で、自販機の缶コーヒーを飲んでいた。
　――言いたいだけ言いやがって、
　慎二はやるせない気持ちだった。サラリーマンは上司には逆らえない。あの社長の説教を年中聞かされると思うと、憂鬱この上なかった。しかも、本など半分馬鹿にしている。
　だが、あの社長の言うことは事実ばかりだ。１兆６千億円の経済規模を書籍と漫画と雑誌で分け合っている。漫画が一番強力なライバルかも知れないが、確かに小さなパイには違いない。あの社長の若いときにデビューした作家しかいないと言っていたが、若いときには本を読んでいたと言うことだ。
　慎司は帰り道、駅前の書店をのぞき、文芸書の売れ筋を確かめた。

4.

4.

　このまま帰るのもままならず、考え事をしながら山手線をぐるぐると回っていたが、そのうち飽きてアパートに帰った。執筆活動に戻らなければならない。背広を脱いで丁寧に折りを戻すと、ハンガーに掛けて干しておいた。

　夕食の買い物に出かけての帰り道、途中で裕子が追いついてきた。
「慎二君、待って。はあはあ」
「あれ、どこから付いてきたの？」
「そこの角まわったとこから。あのさ？」
「何だよ」
「早速会社に秋山さんから電話があったんだけど」
「早いんだな」
「その意味分かる？」
「いいや」

　慎二がそう言うと、裕子は少し間をおいてから口を開いた。

「悪い知らせほど早いものなの。今日のお話はお断りしたい、ですって」
「やっぱり」
「でも、理由は慎二君が考えていたのと違うわよ。……多分」
「文学に没頭する奴が嫌いなんだろ」
「違うわよ。本当は理由なんて教えてくれないんだけど、秋山さんのこと個人的に知っているから教えてもらったの。……端的に言うと慎二君の勉強不足の姿勢が好ましくないと言っていたわ。作家を志す割に日本の出版業界の規模も知らないし、文学の向かう方向性も捕らえていないし、その試みもしていない。文学でも成功しないだろうって言われちゃった」
「その割に嬉しそうだな」
「次を紹介するわよ。作家なんて辞めて頑張ってよ」
「でも、あの社長なかなか鋭いな」
「だからぁ、経営者って厳しいのよ。もっと社会に出て刺激受けなきゃ。原稿用紙を眺めていたって何も見えてこないでしょ」
「裕子まで厳しくなったな」
「そうよ、慎司くんがまっとうな人間に戻るまで諦めないから」

「ふん」

　アパートの階段を上がり、鍵を開けて部屋に入ろうとすると裕子も付いてきた。背広を取りに来たのかなと思っていると、違った。
「ところで今何を書いてるの？」
「お、興味があるの？」
「そんなのじゃないけど、あの社長にけなされたんじゃ、と思って。あの人、慎二君が感じたとおりすごく鋭いのよ」
「ふん」
　慎二は面白くなかったが、書きかけの原稿用紙を五十枚ばかりクリップで留めて裕子に渡した。裕子は一枚目から丁寧に読み始めた。

　――蔵の中。一人称小説で古物商を営む主人公が、田舎の農家を紹介されて買い出しに出掛ける。そこにあるのは大きな旧家で三つも並んだ土蔵だった。二つは新しいもので農機具庫や米倉になっているが、一つだけ古い土蔵があった。当主に聞くと江戸時代初期に建ててそのままだという。主人公はアルバイトの青年と共に中に入れてもらう。
　そこで目にしたものは古い鎧《よろい》と刀剣類、そして家財道具類だった。だが、主人公はその鎧を見た途端、その魅力に取り憑かれる。逆にアルバイトの青年はその鎧を見て青ざめていた。
　一旦土蔵の外に出て、当主にこの道具類の由来をさりげなく聞いてみる。余り興味を持つと値段がつり上がることがあるからだ。だが、元々、刀剣や鎧などが農家の持ち物のはずがなく、落ち武者狩りで取得したものも多いと言われていた。そして、その鎧と刀剣の来歴については、当主も余り詳しくは知らなかった。
　だが、主人公は鎧と刀剣をまとめて二百万と申し出、これを買い取ってしまう。ワゴン車に鎧を運ぶ青年は、主人公を呼んだ。

「ふうん。この後どうなるの？」
「気になる？」
「べーつに。ビール貰うわね」
「珍しいな。背広取りに来たんじゃないのか？」
「次も使うでしょ。サイズはきつくなかった？」
「いや、丁度よかったよ。でも、次って何だよ」
「就職活動よ」
「どうして、俺の人生にそこまで干渉するんだよ」
「あなたのこと何故だか他人とは思えなくてって、冗談はさておき、本気で心配してるのよ。ちょっとは理解してよ」
「わかったよ」
　慎二はビールを飲んで少しだけ赤い顔になった裕子が愛おしく見えた。そのまま裕子

の肩に手を添え、口づけしようとした。だが、裕子は身体をよじって慎二を避けた。目が怒っていた。
「何だよ冷たいな。いいよ、もう、それで俺の作文の成績は？」
「何か暗いわよね。これってエンタメ？」
「純文学のつもりだけど」
「きゃはは。ホラー物かと思っちゃった。全然怖くないと言おうとしたんだけど、ごめんね」
　裕子は意図的に、積極的な評価を避けていると感じた。昼間社長にけなされたばかりで、裕子もあまり文学に触れたくないと言いたげだった。
　慎二は裕子を放っておいて、夕食の総菜をレンジに入れ、味噌汁だけ自分で作り始めた。ご飯はタイマーで炊飯中である。
「あら、中々いい手つきなのね。いいお婿さんになれるわよ」
「冷やかすんじゃない。裕子こそ料理できるのか？」
「普段はあんまり。……箱入り娘で何もさせてもらえないの」
　そう言って慎二の作業を興味深げに見ていた。慎二はわざと大仰《おおぎょう》に振る舞って、味噌汁の具が煮だって来たところに、火を少し弱めて味噌をお玉に半分入れて料理箸で溶かした。
「いい手つきね」
　裕子が感心して言った。慎二は真剣だ。
「裕子って本当に料理できないのか？　　結婚したら困るぞ」
「ふうん。心配なんだ」
「家事分担主義なのか？」
「へへ、慎二君心配してる。あたしのこと誰と結婚すると思ってるのよ？　　その方が興味あるわ」
「俺かい？」
「自信過剰ね。あたしは無職男と結婚するほど人間が出来てないもの。じゃあ帰るわね」

　裕子は適当に慎二をからかうと、今日は機嫌良く帰って行った。アパートの階段を下りていく足音も何となく軽やかな気がした。慎二は窓から彼女が駅の方角に向かったことを確かめると、火を消してさっきの原稿を拾い上げた。
　クリップを外し、一枚一枚丁寧に目を通していった。結構自信のある作品だったのだ。ここからの展開をどうしようかなと、少し迷っていた。最初に大まかなプロットを作ってはいたが、鎧にこもる武士の思いを古物商の主人公が感じる様に書くつもりだった。だが、裕子に、――ホラーかと思っちゃった、ごめんね、と言われ、一気に自信喪失してしまったのだ。武士の怨念など出せば、まさにその通りになってしまう。読者に先を期待させるのもテクニックだが完全に先を読まれるのは失態だ。
　それで慎二は前半五十枚の中にそこまで予想させる伏線があったのかと気になったのだ。

この蔵の中の小説は次の新人賞の応募作品のつもりで書いたのだ。裕子にさらっと読まれてホラー小説の出来そこないと評価されたのでは、一次選考に残る可能性すらないに等しいと思った。

原稿を一枚目から順に追っていくと、主人公の動きにおかしな点はなかった。

――蔵の設定だ。

慎二は気付いた。三つの蔵を持つ裕福な農家で一つだけ古い蔵があり.....そう書いた時点でいわく付きの何かが出て来そうな印象を受ける。

――ちょっとまずかったな。

慎二は原稿を丸めて後ろに転がった。もう夕食のことも忘れて事態の収拾.....そんなオーバーな話じゃないが.....を考えこんだ。どう考えても抜け道はなかった。それに実際に農家の蔵など見たこともない。

――完全にホラー小説の原稿だな。

慎二は原稿を投げ出した。他にネタを考えなければならない。

時計を見るといつの間にか八時前になっていた。アルバイトが待っている。

慎二は忘れていた夕食を冷めたまま食べた。ご飯を口に放り込み、冷めた味噌汁で流し込む。おかずは冷凍食品の魚フライだ。かつてはソースを一杯掛ければご飯一杯は食べられたが、そんなことは学生時代までが限度だった。今は余り食欲もない。

食べ終わると、茶碗と皿を汚れがこびりつかないうちに、洗剤を掛けてさっと洗って食器入れに戻した。

それから今後のことを真剣に考え出した。あの小説は今月末が締め切りだった。あのまま書き続ければ十分間に合ったのだが、あれでは使えない。新たに案を練り直さなければならなかった。

慎二は立ち上がり、台所に行き冷蔵庫を開けた。ビールを取り出し蓋を開け、そのまま一気に飲み干した。とんだハプニングのために執筆が中断してしまったのだ、飲まないとやっていられない、その時の慎二はそう思った。

しばらくしてコンビニの夜間店長から、早く来てくれとの連絡があり、慎二は腰を上げた。

5.

5.

アルバイトから帰ってきてシャワーを浴びて横になり、暑さで目が覚めると枕にしていた座布団が汗で染みになっていた。まだ八月だ、午前中とは言え日が高くなると寝ていられないほど暑くなった。

――こう暑いと書けないな。避難しなくちゃ。

避難するのに思い当たる場所もない。デビューするまで喫茶店で書いていたという人の話も聞いたことがあるが、コーヒーを何杯も注文するほど懐具合も豊かではない。ふと思い立ち、母校の講立大学の図書館を利用することを思い立った。原稿用紙を五十枚ばかり封筒に入れ万年筆をシャツの胸ポケットに入れて、アパートを出た。

だが午前十一時になるとすでに歩くには暑すぎた。道の向こうがゆらゆらと陽炎になっている。このまま歩き続けると熱中症で倒れそうな気がした。それで大学まで行くのは諦め、途中の喫茶店に入ってしまった。

「アイスコーヒー」

とウェイトレスに告げて、しばらく雑誌を読んでいると、芥川賞秋期の選考会結果が発表されていた。受賞したのはまだ大学生の若者だった。作品は題名しか分からないが、文芸誌に掲載されていたものらしい。それしか分からなかった。直本賞の方は名前は知っている作家だった。ただし読んだことはない。

慎二が手にした雑誌が文芸誌ではなく週刊誌だったので選考委員の意見など詳しい情報はなかったが、何にしても気になる内容ではあった。

――あの社長の言っていた、文学の向かう方向性。その一端か。

ウェイトレスがアイスコーヒーと伝票を置いて、またカウンターの向こうに消えた。慎二はアイスコーヒーにストローを差し込み一口だけ飲んで作業に掛かった。

封筒から原稿用紙を取りだし、前回の失敗を思い浮かべた。

――何が悪かったのかな？

考え込んでいると、慎二のスマホが鳴り出した。財政難でもこれだけは維持していた。新人賞が取れたら出版社との連絡用に必要と思ったのだ。因みにアパートに電話回線は通していない。

「はい、杉原です」

「ああ、慎二君？　　裕子だけど今いいかしら」

「いいですよ」

「あのさ、印刷会社の総合職なんだけど、受けてみる気ある？」

「何だよ、今度は印刷工か？」

「違うわよ。日本印刷テクノロジー株式会社。印刷部門も含めて企画担当者なの。具体的には企画課オペレーティングリサーチグループ。場所はね、東京都千代田区丸の内」
　いきなり、オペレーティングリサーチなどと言われても、何をすればよいのかすらさっぱりわからない。慎二はいぶかしんで訊ねた。
「何の仕事？」
「印刷会社は日々進化してるわ。コンピュータの基盤とか、ＩＣチップの回路図のプリント、液晶テレビのパネル。それから、雑誌のカラーページ、慎二君の好きな本、それらの新しい事業を探すことと、それら事業の将来性の評価が主任務だって。求められるものは創造性、好奇心、望ましいものは、統計学の知識、理科系の知識だって。因みに待遇はね、二十五歳で基本給二十七万円、賞与は六ヶ月を六月と十二月に二分割で支給、休日は年間百二十日、本社カレンダーによる。厚生施設は都内二カ所、山梨に研修所、保養所が全国三十カ所.....」
　裕子は能弁に語った。
「もういいよ。分かったから」
「じゃあ、先方に伝えていいのね？」
「その分かったじゃなくて、もう喋らなくていいと言う意味だ。そんな仕事俺に出来るのか？」
「出来るのか、じゃなくて、今の慎二君に必要なのはどうやったら出来るか、でしょ？」
「段々生意気になっていくな」
「何よそれ。せっかく探してきてあげてるのに」
「悪かったよ、因みにどこの知り合い？」
「うちの社内報をそこに依頼しているの。広報課で紹介して貰ったの」
「それはご苦労だったな」
「断るんじゃないでしょうね？」
「恐喝かよ？」
「違うわ。あたし、あなたにまっとうな人間になって貰いたいから、忙しい合間を縫ってこうやって探してくるんじゃないの。そうしないと慎二君、一生結婚も出来ないよ」

　裕子は慎二と結婚したいために、こうして慎二をサラリーマンにしようとしているのかと、勘ぐった。

「裕子、俺に気があるの？」
「馬鹿！　　調子に乗るんじゃないの。行くの、行かないの？」
「分かったよ。行けばいいんだろ。面接だけだぞ。多分前と一緒だぞ」
「駄目よ。ちょっとは勉強してから行ってよね。社会常識とかあんまり欠けてると、落とされるより前に馬鹿だと思われちゃうよ」
　――どっちも同じじゃないか。
「慎二くん。社会常識って意味分かる？」

「名刺は先に出すとか、先方より先に座るなとかだろ？」
「分かってたらいいんだけど、心配だな。日本のＧＤＰとか知ってる？　為替レート、ドル、ユーロ、ポンドぐらいは常識だよ」
「帰りに新聞見ておくよ」

裕子は先方の面接日時のアポイントメントを取り付けたらまた連絡すると言って、電話を切ってしまった。慎二は前回以上に閉口ものだった。あの社長はいきなり工業製品の値段を聞き、慎二が作家志望というと出版業界の経済規模を聞いてきた。ＧＤＰなんて聞かれてもすぐには答えられない。
慎二は執筆する気が失せて、アイスコーヒーを飲み干し、伝票を持ってレジに行った。さっきの女の子がいた。大人しそうな目をしていた。切りそろえられた前髪と後ろで一つにまとめられた黒髪が真面目そうな印象を与えている。
「君、日本のＧＤＰって知ってる？」
「え？　確か五兆ドルでしょう？」
慎司は一本取られた気がした。
「どうして知っているの？」
「はい。本業は学生なんです。法学部なんですけど国際政治に興味があって」
「あ、そう」
「六百円になります」
「はい、六百兆円」と、慎二は百円玉六枚を差し出した。
「あはは、はい丁度頂きます。ありがとうございました」
「どうも」

慎二は面白くなかったが、自分の小説の限界が見えてきたような気がしはじめていた。実社会の経験がないために、小説にリアリティがないと感じてはいた。だが、元々小説なんてものは実際にないことを書いている商売だ。でも、社会経験があるのとないのとで大きく厚みが違ってくる。純文学や恋愛なんかはまだいいが、エンタメ小説は特にそうだ。

考えが変わって帰りは暑いのを我慢して大学の図書館に行き、少し古いものしかなかったが、ＧＤＰについての内閣府の資料を調べてみた。日本だけで世界の１０パーセントをまかなっていた。アメリカと合わせると世界の２割だ。
――少子化で働き手がいなくなり、日本のＧＤＰ分が消えると世界経済が大混乱する。だからアメリカ国務省が懸念を表明していたのか。別に日本人の赤ちゃんが産まれようがどうなろうが関係なかったんだ。

それだけ調べて日本文学の書架に行ってみた。
最新刊は流石に入っていないが、去年の下期（十月から三月までの刊行分）はカバー

されていた。大体の流行と傾向は分かる。ただ、今の主流のライトノベルズや漫画はまだここでは市民権を得ていないから、置いてあるのは文芸書ばかりだ。
　慎二は何冊か、ランダムに選んで、読書スペースに運んだ。

　一冊目は有名な女流作家の純文学だったが、途中まで読んで放り出した。これって.....ほとんどポルノじゃないかと思ったからだ。他の本も読んでみたが、通俗的な本を出版していることが分かる。そうすると、新人賞のあの壁の高さは一体何なんだろうと疑問に思う。あそこで賞を取った作品はこれら通俗小説には含まれない、極めて技巧的にもプロットにも凝ったものである。推理小説部門でも人気作家が、ステレオタイプな名探偵ものばかりを書いてあるのに比べ、新人賞では登場人物の細やかな心理描写やトリックの斬新さがないとまず通らない。そして、この参入障壁の高さに加えて、新人作家の書店での扱いの低さにも納得がいかなった。
　これが、裕子の言っていた、賞の特殊性のことかと納得した。

　――日本のＧＤＰは五兆ドル、約五百兆円強だ。その中で出版業は漫画を主力に一兆円ちょっとかない。各自動車メーカは年間五兆円から二十兆円の売り上げだから、ゴミのような市場でしかない。
　この小さなパイのぶんどり合戦の中に突入しなければ、作家として認められない事実に、慎二は自分の生き方に自信をなくしてきた。

6.

6.

　その夜、裕子から電話があり、水曜日の十一時に丸の内本社の受付に、人事課の丸山さんを訪ねるようにと連絡があった。
「また、社長が出てくるのかい？」
「冗談ポイね。大企業の社長なんかに会えるわけないわよ。いいとこ人事課長と企画課長までね。多分企画課長がメインになると思うけど、時間が十一時というのが気になるの、気をつけてね」
「どういう意味だ？」
「面接が三十分で終わればそれで終わりなんだけど、慎二君には不都合なの。のぞみありならもう少し時間をとるわ.....ひょっとしてランチミーティングかもしれない」
「昼飯にありつけるのか」
「馬鹿ね。それも面接のうちよ。相手より高いもの注文しないでよ。いい？」
「相手と同じものね」
「そうそう。じゃあ健闘祈るけど.....ああ、小説。あの続きでいいんじゃない？　ホラーじゃなければ面白いと思うよ」
　――今頃言うなよ。

　慎二は水曜日の午前十一時に丸の内の本社に早めに着いた。人事課の丸山さんを呼び出して貰うと、受付嬢が「伺っております」と言い、三階の応接室に連れて行かれた。
　しばらく待っているとコーヒーを出してくれた。手を出さずに待っていると、人事課長と企画課長の二人がファイルを持って入ってきた。慎二は立ち上がって挨拶した。

「どうぞ、お掛け下さい」と、企画課長が言った。
「失礼します」
「それで、経歴は荒川物産さんから聞いています。作家志望とか？」
「ええ」
　また、前の面接を思い出した。すでにトラウマになりつつあった。

「まあそう言う個性的な人に向いているかも知れません。こちらでの仕事は新たな事業を探してその将来性、収益性を調べて企画するのが任務です」
　企画課長は、柔軟な考え方の出来る人らしかった。
「その様にうかがっています」

「例えば液晶テレビの将来性など、開発当初としては冒険だったんですよ」
　企画課長は意外なことを喋りだした。それに現在ではテレビと言えば液晶テレビしかない。その液晶テレビの将来性が冒険だったなど信じられない。
「開発自体は一九六〇年代後半から始まりました。当時は電圧をかければ色が変わるガラス板。その程度の認識だったんです。実用化後も長らく電卓か時計にしか使われていませんでした。その時に電機メーカから共同開発の打診があり、将来性の評価をしたんです。担当者はまだ入社三年目の青年でした。どうしたと思います？」
「さあ、電気代が安くなれば買いますかというアンケートを採ったんですか？」
「それもしました。ですが、決定的な点は画質と設置スペースでした。当時の液晶技術では動く画像はどろどろとしか映らす動画には不向きでしたし、斜めから見ることも不可能でした。それにコントラストも高くなかった。これら問題点を克服できるのか、彼は大学の研究室も巻き込んで見通しを立てました」
「電子関係に詳しい方だったんですか？」
「いいえ、文系卒です」

　午前中の面接はそれで終わり、慎二は訳の分からないままに、昼ご飯に誘われた。裕子の言っていたランチミーティングのことと思った慎二はついていった。丸の内のビルの地下にあるレストラン街だった。夏場だからと言うことで鰻の店に入った。
「じゃあ、鰻重特上三つね」
　と人事課長が注文し、お茶を飲んだ。慎二も口をつけた。
「ここの鰻は美味しいんですよ。杉原さんはお好きですか？」
「は、はい」
　高級鰻店など初めてだった。間もなく鰻重が運ばれてきた。お重に大きな鰻が二尾入っている、確かに特上と言うだけのことはありそうだった。身は柔らかく脂が乗っていた。
「関西では鰻は腹からさばくそうですね」
　と人事課長が言った。企画課長が答えた。
「そりゃ、はらわたを取らなきゃならないんだからその方が合理的だよ」
　慎二には何のことか分からなかった。自分の鰻を見ると背中から包丁を入れられていた。このことかと思った。
「杉原さんどう思います？」
「ええ、関西の方が合理的ですよね」
「でも、理由があるんですよ。ね？」
　鰻屋の大将が近くにいたので話しかけた。
「ああ、江戸前の鰻は全部背開きですよ。ほら、お侍の町だったから腹切りと言って嫌われていたんですよ。その伝統かな」
「他に伝統というと、魚は全て頭を左にして腹を客側に向けて出します。杉原さん御存知ですか？」
　慎二がそんなこと知っているわけはなかった。
「こんな話をするのは別にあなたの雑学度を調べているわけではありません。新製品の開発はしたけど売れない。調べてみたら社会風習上の理由で嫌われたなど泣くに泣けない

事態もあるんですよ。そう言うことも知っておいて貰いたいんです」
「なるほど、勉強しておきます」
「それから、印刷物でもっとも高価なものって何か御存知ですか」
「それは、.....ベストセラー本ですか？」
「ははは、出版社は儲かるかも知れませんね。ですが、日本のミリオンセラーなど大した印刷物ではないんですよ」
「そうなんですか？」
「アメリカなどの英語圏では大きいのは一千万部以上です。日本は５万部出ればベストセラーなんて言われますが、ベストなんかじゃないんですよ。その上、実際の作業は初刷り五千部からスタートし、売れ行きを見ながら少しずつ増刷して最終売り上げが百万部でしょう？　　印刷会社としてはあまり儲かる仕事じゃないですよね」
「それで、高価な印刷物って言うのは」
「発想の転換です。財務省印刷局が印刷している一万円紙幣です。これ以上高いものはありません」
「それと、この仕事とどういう関係があるのですか？」
「我々も、儲かる印刷業を探しました。お札は法律で刷ることが出来ないので、代わりにお札より高いものを探したんです。それがＩＣチップのパターンや液晶パターンの印刷でした。ですが、やはり財務省にはかないませんでした。日本のメーカーでＣＰＵを作ってくれればいいんですが、それ以外のチップで、例えばメモリーなどはやはり単価が安いんです」
「じゃあ、端的にわたしの採用価値は、それを生み出すかどうかですか？」
「すぐにとは考えていません。無理ですから。ですが育てて伸びる人材かどうか。それは人事課長の判断ですが、伸びそうなら採用するし伸びそうになければ残念ですが。と言うことです」

　この後、企画課長は仕事に戻り、慎二は人事課長に誘われてコーヒーを飲みに行った。この会社の具体的な業務内容や、企画課で採用された場合の仕事内容の確認、それから、雇用条件の確認だった。
「ざっとこんな具合です、もし採用が決まれば杉原さんは執筆活動に支障が出ると思いますが、作家は諦めますか？」
「すぐには決められないと思います」
「作家を目指す理由はあるんですか」
「学生時代に触れた現代文学がきっかけです。人に感動される作品を作りたい、後世まで残る作品を書きたい、そう思ったんです」
「なるほどねえ。でもそんなこと思うのは若いうちだけだと思うよ。工業製品だってあまり変わりはないんじゃないかな。後世には残らないと思うけど」
　慎二も大口を叩いた割に、自分の作品が後世に残る自信はなかった。

　アパートに戻った後、また、慎二は考え込んだ。サラリーマンは作家など全然認めて

いないことは、よく解った。だからと言って引き下がる気もない。もし、採用されたら勤務時間中に書いてやれとさえ思っていた。

九月に入ってすぐに意外にも採用通知が速達で送ってきた。九月十五日から出社のことと通知書類にあった。すでに裕子にも連絡が行ったらしく、上機嫌の裕子は池袋のおしゃれ系居酒屋に慎二を誘った。

7.

7.

　慎二がおしゃれ系居酒屋に行くと裕子が先に来ていた。珍しいなと慎二は思ったが、就職が決まってよほど嬉しかったのだろう。いや、それ以上に作家という得体の知れないものから足を洗ってくれたのが嬉しかったのかも知れなかったが、それについては、慎二は彼女を失望させかねないと思った。
「慎二君良かったね。これプレゼント」
　裕子は満面の笑みで、きれいにラッピングされた包みを慎二に渡した。
「何だよ？　　改まって」
「ネクタイ。これからいるでしょう。背広はしばらくあれ使ってていいからね」
「ああ、ありがとう」
　店員が料理とお酒を持ってきた。慎二には裕子がこんなにお祝いしてくれるのに少し違和感があった。
「それでね、三ヶ月で試用期間が終わるじゃない？　　そしたら正社員だよね」
「ああ、それまで持てばな」
「嫌なこと言わないで。そのときには一度うちに遊びに来て欲しいの」
「何か面白いものでもあるのか？」
「そう言う意味じゃなくて、両親に会わせたいのよ」
　何か婚約者のような扱いだ。慎二としては裕子と一緒になることに異存はなかったが、作家になることを諦めていないのに、両親なんかに紹介して彼女自身困ることになるのではないかと少しだけ気にしていた。

「両親ねえ」
　つぶやきながら、慎二はカクテルを少しだけ口にした。フルーツの味でアルコールの感覚はしなかった。確かに慎二は裕子が好きだった、他の男には取られたくない。だから結婚したい。だが、裕子は作家になることを諦めるのが絶対条件だと言っている。定職のない男の嫁になる気はない。かつてそう言いきった。
「裕子、あのさ」
「何よ」
「裕子って大企業の正社員の男と結婚できればそれでいいのか？」
「馬鹿にしないでよ。相手の人間性を最大限重視するわよ」
　――本気かな？
「人間性って？　　小説にうつつを抜かさない奴が偉いとでも？」

「少なくとも将来性のないことにうつつを抜かしている人よりかは偉いと思うな」
「何だいそれ？」
「宝くじ、競馬、競輪、その他不確実なことに人生を賭けないで欲しいの。一匹狼ならいいけど、その人に家族がいると聞いたらたまらないじゃない？　奥さんは？　子供は？　どうしたらいいのかな？　考えたことある？」
「いや、ちっとも」
「でしょうね。本来なら慎二君はとっくに切り捨てているカテゴリーの人間なの」
　――はっきり言いやがるな、今日は。
「切り捨てられない理由ってえのを聞かせて欲しいな。裕子君」
「あたしに言わせないでよ」
　と、裕子はすっとぼけた。慎二もそれきり口を利かなかった。端から見たら奇妙なカップルに見えたに違いない。女性はおしゃれをして男性にプレゼントを嬉しそうに渡して、それっきり一言、二言で口を利かなくなったのだ。離婚寸前の夫婦の様だった。
　しばらく、カクテルをがぶ飲みして白けきった慎二は、帰ろうと立ち上がった。
　裕子は、すっと慎二に伝票と共に、一万円札を差し出した。
「何の真似だ？」
「給料日までまだ一ヶ月あるんでしょう？　あたしに奢るなんてボーナスが出てからでいいわ」
「そう」
　慎二は、レジに行きその一万円札で支払い、お釣りをポケットに入れた。
　表に出ると、裕子はタクシーを拾って乗り込んだ。
「ちゃんと来週から真面目に通勤するのよ。いいわね！」
「うるさいな。わかってるよ」
「わかってなさそうだから、言ってるのよ」
　そのまま裕子の乗ったタクシーは走り去った。
　慎二はその足でとぼとぼとアパート目指して歩いた。
　――全く、何が本来なら切り捨てているカテゴリーの人間だ。ふん。

8.

8.

機嫌の悪いままアパートに帰ると、冷蔵庫を開け、缶ビールの蓋を開けてちびちび飲みながら、最近執筆が止まっている原稿に目を通した。
「今月末の応募は無理だな.....まあいいか、四月に応募したのが自信作だったし、今月末発売の月刊文芸に一次選考通過作品が掲載される。二次は来月号で、.....今年の終わりには新人賞か。へへへ」
と、不気味な笑みを浮かべた。取らぬ狸の皮算用だったが、書きかけの原稿を放置する理由付けが出来ればそれで良かった。

ビールを飲んでそのまま寝てしまった慎二が目を覚ましたのは、明くる土曜日の午前十時だった。昨日放置することにした原稿はよだれでべとべとになっていた。もう作家失格もいいところであった。
慎二は、昼から駅前のスーパーで弁当を買ってきてお昼にし、次の十月末締め切りの、月刊近代主催の東京文学大賞に提出する作品の構想を考え始めた。原稿用紙の裏に、鉛筆で主人公の名前や生い立ち、他の人物との相関図を書き物語を考えた。
――いや、こいつは前の小説で主人公だったな。別のに変えよう。
どうしてもアイディアが浮かばない。

不意にドアをノックする音がし、裕子が顔を出した。少し中を観察し慎二を睨み付けた。
「何やってるのよ！　会社に提出する書類の準備は出来たの？」
「い、いや、これから」
「それに散髪くらい行ってよね。社会人の常識よ。ひげそりはあるの？」
「ああ、日曜日に行くよ」
「それから、背広は適当にアイロン掛けないとしわになるよ。クリーニングに出してもいいけど」
「あ、ああ」
慎二は立ち上がって、床に置いてあった背広を手で伸ばし、ハンガーに掛けて吊した。
「ひょっとしてさっきまで寝てたんじゃないでしょうね」
「いや、そんなことないよ。午前中は小説のプロットを考えて、午後から昼飯の弁当を買ってきたところだ」
「何よ、小説って。まだ諦めてないの？」
「四月に書いたやつの発表が、一次選考だけど今月発売の月刊文芸に出るんだ」

「そう、じゃあ楽しみだね。でも落ちたら本気でやめてよね。それから、会社提出書類は時間が掛かるでしょ」
「そうなのか」
「今までの経歴を、自分の職種に合わせて書くの。それから、志望の動機。作文は得意だよね。履歴書に写真、判子は持ってる？」
「あ、ああ。他の昔書いた奴じゃ駄目なのか」
「当たり前でしょ。今度入る部署に合わせて書くの」
　慎二は履歴書の用紙を出した。
「大学卒業は何年だっけ？　　平成で」
「駄目だめ。中学卒業から書いて」
　裕子の指導は細かかった。
「あれ、慎二君って富山だったの？」
「元から東京なら、こんなアパートなんかにいるもんか」
「あら、そう。それから、入ったのは法学部でしょ。途中で転部したとはっきり書いた方がいいわ。志望動機は御社の社風が気に入り、.....とか、自分の能力が生かせると感じたとか、嘘でも書いてね」
　書類を書いた後、言われたとおり散髪屋に行き、髪を短くカットして貰い、それから裕子に誘われ、買い物にも出掛けた。慎二には新人賞以外の欲しいものなどなかったので、店をのぞいて、何か見かけてもやっぱり他人事だ。

「何か買いたいものがあるのか？」
「あたしじゃなくて、慎二君のいるものよ。名刺入れとか持っているの？　　スーツももう一着あった方がいいわね」
「金ないよ。俺、自慢じゃないけど」
「持ってるなんて思ってないわよ。ボーナスまでの貸しにしておいてあげる」
「親切なんだな」
　それには裕子は答えなかった。
　取り敢えず、新入社員に必要な装備を一通り買って帰った。裕子は山手線の改札でそのまま別れた。慎二の住む池袋に回ったのでは、帰りが遅くなる。

　借りた背広と、今日買ったビジネススーツを部屋の鴨居《かもい》に掛けて、見比べた。慎二はサラリーマンになることに抵抗があったが、確かに裕子の言うとおり最大のチャンスかも知れなかった。とっとと就職して裕子と結婚して幸せに暮らすのもいいかも知れない。
　だが、部屋の隅に置いてある箱を見て、今までの苦労を思い起こした。これまで応募した作品のコピーが取ってあるのだ。今でこそ自堕落な作家の玉子だが、学生当時は暑くても寒くても眠くても、締め切りに合わせてきっちり規定枚数通り仕上げてきたのだ。
　書きかけの原稿を放り出したのは今回が初めてのことだった。

居眠りしかけた慎二だったが、引きこもりには引きこもりのプライドがある。この小説は無駄になるかも知れないが、最後まで書き上げようと思った。

また、「蔵の中」の書き直しである。蔵から鎧の入った櫃《ひつ》をアルバイトの青年と運び出すところから物語を再開した。筆が乗ってきた。次のコンテストに合わせて枚数を変えようと色気を出した。応募要項を引っ張り出したら原稿用紙百五十枚までとなっていた。元の物語は百枚の予定だったから、何かエピソードを加えて枚数を合わせよう。そう考え、プロットを書き留めたノートをめくった。

――バランスが崩れるな。

当たり前だった、元々短編に近い長さだったのだ。少し変えれば大幅に狂ってくる。また、元の五十枚分を読み返した。そんなことをしているうちに日曜日の朝を迎えた。

洗面所に行って顔を洗いながら、明日からサラリーマンかと思い直した。小説を書いてていいのだろうか。心の迷いが手元を狂わせ、ひげそりで顔を引っ掻いた。皮膚の表面が鋭い刃物の先端で切れ、血が一筋流れた。

真面目にサラリーマンをしていても、無能と判断されたら結局、切られてしまう。かといって今投げ出せば、裕子が去ってしまいそうな気がする。今の慎二には裕子をつなぎ止める魅力も何もなかった。それ位は分かっているつもりだった。彼女の親切は将来への投資なんだと思っていた。だから、尚更この話をうまく自分の将来に結びつけないと、彼女とは結婚はおろか、下手をしたら他の男に取られてしまうだろう。

だが、作家としてデビューし、それで食べて行けたらそれはそれで、成功と言える。その時はさしもの裕子も慎二の才能を見直さざるをえないだろうし、そのまま結婚を申し込んでも良さそうな気がした。

――悩みはつきないな。

9.

9.

　次の朝、慣れないスーツを着て、裕子のプレゼントのネクタイを締め会社に出掛けた。定刻通り企画課に出勤すると、もう何人かが仕事をしていた。
「あら？　　あなたが杉原さんね？」
　と、ここの事務員らしき女性が声を掛けてきた。まだ、二十二、三歳くらいできれいな人だった。肩まで伸びた軽くカールした髪を少しだけ茶色に染めていた。
「はい、杉原です。今日からお世話になります」
　一応挨拶だけしておいた。
「和田美紀です。このフロアの庶務担当です。こちらこそよろしくお願いします。課長は、いつも九時に出勤なのでそれまで資料でも読んでいればいいですよ。あなたの席はあたしのお向かい。何か質問はありますか？」
　慎二は照れた。和田美紀は短いスカートにきれいな脚をのぞかせていた。魅力的な娘だった。
「あ。それから、杉原さんの名刺を作るんですけれど、デザインに希望はありますか？」
　これまで名刺を持ったことのない慎二はどう答えてよいかわからなかった。居酒屋で常連客が、いつものやつと頼んでいる横で何を頼んでいいかわからない若造の気分だ。

「いえ、標準で結構です」

　やがて、九時になり課長が来ると、慎二はスタッフ全員の前で挨拶させられた。このとき慎二はあえて作家志望とは言わなかった。隠れて原稿を書く気だったからだ。

　後で、課長に呼び出され、この会社の説明と仕事内容を教えられた。
「休暇は試用期間中は認められていない。だから欠勤扱いになるが、風邪を引いたとかやむを得ない場合は、試用期間後の有給休暇に振り替えるなどの処置はとってやる。それから、書類に関しては、前の席の和田君に聞いてくれ」
「はい」
　慎二はちらりと仕事をしている美紀の方を見た。
「しばらくは、新入社員教育を行うが、それだけだと寝てしまうだろうから課題を与える」
　課長は自分の書類受けに今日回ってきた中から一通取り出した。
「これは当社の大阪印刷所の拡張工事に関する稟議書《りんぎしょ》に添付する資料だ。

見てのとおり大阪営業所の意見が述べられ、所長の判子が押してある。その次が本社営業の見解で、担当者が将来性を評価して課長が判子を押している。その次が君の仕事だ。大阪営業所の営業実績と工場の稼働状況などはオンラインで今何を印刷しているか分かるようになっている。但し、資料は社外秘なので取り扱いには注意すること。今日中に何らかの君なりの意見を出してくれ。以上だ」

慎二は自分の席に戻ると、目の前のパソコンから大阪営業所と、大阪印刷所の業務実績を調べた。確かに拡張工事の申請を出してくるだけのことはあり、業務は一杯詰まっていて、印刷機の稼働状況は百パーセント近かった。それなら、設備更新を許可していいじゃないか、と単純に思った。

本社営業部の覚え書きをみて、その考えは打ち砕かれた。

「大阪印刷所の設備更新計画の件、

本社営業課長、

当課としては、本計画は見送ることとし、さらには東京印刷所への統合も視野へ入れた撤退を提案する。

理由、

一、営業内容が、地元コミュニティ誌と商用チラシのカラー広告が九十八パーセントを占めている。停滞している関西経済が立ち直るのは、優秀な行政官が改革断行を進めることが絶対条件だが、現状ではその可能性は期待できない。何度選挙をしても改革能力のない同じ議員が地元だからと、当選している。こういった背景に鑑み、将来のマーケット性はないと判断する。

二、大阪印刷所はもともと、関西の出版業の業績を当て込んで経営していたが、相次ぐ撤退で、今や地元コミュニティ誌とカラーチラシがメインである。印刷能力の限界に達しているのは喜ばしいが、一、の理由から、拡張工事はそのリターンが見込めない。むしろ、容量オーバーの仕事は他の印刷所にまわすか、ひいては将来的に大阪印刷所を廃止し、他の最新鋭印刷所との統合がベストと判断する」

と、こんな判断をしていた。慎二には信じられない思考回路であった。今、儲かっているからというのだけではいけないらしい。

慎二は十時頃、タバコを吸いに喫煙場所に行った課長を追いかけた。

「課長。さっきの仕事なんですが、営業課長はこんな判断を下しているんですが、これは本気なんですか？」

「ああ、彼ならそう言うだろうね」課長は目を細めてそう言った。

「そう簡単におっしゃいますが、彼らも、客から仕事を取るために、必死になって広告のチラシから、地元のミニコミ誌に手を出したと思います。彼らの努力はこの評価に入ってないんです」

「だから、人情味はいらないんだ。将来的に儲かるのか、今、撤退を決めるのか、その理由は何か、それだけ分かればいいんだ。最終的には月末の取締役会で決定される」
「あの、もし、東京印刷所でも文芸誌の印刷で赤字になれば、文芸誌は引き受けないと言い出すんですか？」
「杉原、ちょっと来い」
　課長は、慎二を誰もいない会議室に連れ込んだ。
「杉原、まあ座れ」
　課長に促され、慎二は空いている席に座った。課長は机の上に座って、ざっくばらんに話を始めた。
「この課で求められているのは客観的な事実と、それから導かれる結論だ。報告ではこの順序はさっきの営業課長のものと同じく逆になるがな、あれが間違っているか？」
「.....いいえ」
「杉原の不満は、営業所を守るために一生懸命頑張ってきた人もいるはずだと、それも評価すべきだと、そう言いたいんだな。気持ちは分かるが、情勢が変わっているのに頑張るのも残酷な話だ」
　――慎二の不満は文芸誌を切り捨てようという姿勢自体にあった。
「情勢が変わると駄目なんですか？」
「いいかい。緑の大地なら、水をまいて雑草を抜く価値はある。だが、砂漠になってしまっているのに水をまいたら、狂人扱いされるのが落ちだし、現場社員にその作業を強いるのは却って無情と言えるだろう。だから、杉原の意見を出してもいい。それにはそれを裏付ける客観的事実が必要だ。あるかい？」
「確かに関西経済自体落ち込んでいます。多くの出版物が廃刊に追い込まれています。ですが東京だって同じじゃないですか」
「確かに出版業界はどことも同じ状況だ。だから新人発掘にやっきになっているんだろう、近頃の新人賞は少しおかしいと言うのも杉原が感じているとおりだと思う」
「よく御存知ですね」
「こちらは、出版社が客なのであまり意見は出来ないが、営業から、編集部に苦情を入れたことがある。いくらコストが安くなったからと言って、初刷り部数を大幅に減らして、売れたら少しだけ刷る。そんなことは物流コストがかかるだけなので止めて欲しいと、要請した。大量に印刷して売れない分は倉庫保管という手段もあるだろう？　　だが、却下された」
「売る気がない？」
「そうとしか思えない。今に全国の印刷会社は書籍部門からは手を引くだろう。アメリカの雑誌タイムリーみたいに東南アジアで印刷して世界に配信する様になるかもしれない。杉原の好みではないかも知れないが、そんな時代は近く訪れる」
「ベストセラー作家はどうなるんですか？」
「そんなもの最初から存在しないよ。ベストセラーはマスコミの作り出した幻想だ。いい本なら売れる。そんな幻想を信じて、せっせと手持ちの作家をお尻を叩いて書かせているが、編集部がいいと思う本を、客がいいと思うとどうして言い切れる？」
「若者の本離れを、把握していないと？」

「それも的外れだ、若者は本離れなどしていない。少子化で少なくなったのが影響している。それに可処分所得の高いのは自宅通勤ＯＬとニート達だ。彼らを無視したら商売は成り立たない。出版不況の主原因はネットだよ」
「ネット？」
　慎司は突如課長の口を突いた言葉に、思考がついて行かなかった。
「ウィンドウズとインターネットの普及をきっかけに、誰でも無料で無限の情報に接することが可能になったんだ。もはや、時代遅れの紙媒体の情報に金を払うやつなどいなくなる。それが、事態の本質だよ」
「そんなものですか？」
「自動車や家電製品なら、若い女性向けの製品をどんどん投入しているのに、書籍だと何故でない？　　週刊誌やレディースコミックは別だが」
「文芸書だとどんなものですか？」
「ポルノだよ。それしかない。君の考える文芸とやらに将来はない」
　課長は簡単に言いきった。

10.

10.

　慎二は席に戻ると、営業課長と同じ趣旨の意見を書き、課長に提出した。
「待ち給え。君の調べた客観的資料がないぞ」
「データベースは共通だから営業も同じでしょう？」
「馬鹿野郎！　彼らは商売のことしか考えていない。企画課は、将来性を視野に入れて考えないといけない。だから統計の数字の読み方も違う場合もあるし、同じ場合もある」

　また、席に戻ると、慎二は頭を抱えて考え込んだ。十二時前になると前の席の和田美紀がお昼を誘った。慎二は時計を見て、昼休みにすることにした。
「ここの食堂って、美味しくないし、いつも満員なんですよ」
　彼女はそう言って、外に食べに出ようとした。給料日まで財布の中身の乏しい慎二は、彼女の申し出をやんわりと断り、会社の食堂に行き、彼女の言うとおりあんまり美味しくない定食を食べた。それでなくても余り食が進まなかった。お茶を飲んでいると、他の部署の人たちが大挙してやって来た。別に追い出されることはないが、時間制の不文律があるようだった。それで和田美紀もゆっくり食事したいから外に出たいのだろうと思った。
　慎二はお茶を飲み干すと、自分の職場に戻った。
　その昼休み以来、和田美紀とは何となく気まずくなってしまった。折角女子社員から声を掛けたのに、断ってしまったから、美紀自身恥をかいたと思っているに違いない。

　何となく気まずくなる前に手を打つべきだったのだが、慎二には事務所勤めの経験がなさ過ぎた。ＯＬを敵に回すと仕事にはならない。まだ、美紀とは普通の関係である、これ以上の悪化を食い止めるため、美紀に話しかけた。
「和田さん何食べに行ったの？」
「え、ああ、喫茶店のランチ」
　――それ位なら一緒に行けば良かった。
「そう、初めてだからと思って会社の食堂に行ったんだけど、時間制なの知らなかったからのんびりお茶も飲めなかったよ」
「あら、そうだったんですか。あたしもあそこ、ゆっくり食事出来ないから嫌なんですよ。男の人って食べるのが早いでしょう？」
　――本当は女性とあまり変わらないと思う。しかし、お喋りの時間が長いためだろう。

適当に話した後、慎二は与えられた課題に戻った。結論ありきで、資料をまとめるのだ。無駄な気はしたものの、これは課長が慎二の適性を見るために課した宿題なのだ。

慎二は午後一杯使って、関西経済の中核をなす大阪府と兵庫県の債務が歳入を遙かに上まわり、地域経済活性化より債務処理に血道を上げており、近視眼的ではあるが経済的に上向く可能性は考えられないと、前置きし、大阪印刷所の段階的撤退を結論づけた。

夕方、課長に提出すると、また、文句がつけられた。

「近視眼的とはどういう事だ。プランは長期的なものか、短期的なものかそれを先に設定しろ。長期的なものなら当社の債務の利子も考えないといけないし、短期的なら速やかな売り上げ増または利益増を見込めないとならない。やり直せ」

「長期か短期かはどちらでもいいんですか」

課長はにやりと笑った。

「この書類の役割が分かってないな。取締役会のネタとして使うんだ。当然短期利益が重視される。長期プランを持ち出すなら、余程の見返りがないと議論の対象にはならん」

「見返りですか？」

「そう、例えるとだな.....未来永劫にわたって当社が市場を独占できるとか、社会的に評価され当社のブランドイメージの向上に資するとか。重役が喜びそうなことを書かないといけない」

――そんなことか。

「そんなことと、思うかも知れんが、株式会社の役割は知っているか？　君、法学部にいたんだったな」

――履歴書に書くんじゃなかったよ。

「なんだ、知らんのか？　社員が会社に出資し、会社は業務を通じて利益を上げ、配当を社員に還元すること。商法上、社員とは出資者のことだ。君たちのことは従業員という。要するに株主に対し利益をもたらさなければならない」

課長の説教を五十分近く聞かされた後、慎二は席に戻り書類の書き直しを始めた。五時を過ぎると、和田美紀がさよなら、と声を掛けて帰ってしまった。ふと、他の社員を見ると書類の山の中でまだ作業をしている。夜食のカップラーメンを買って置いている人もいるので夜中までやる気かなと思った。

慎二はその後、何度も書き直しさせられ、サラリーマンの書類作成がこれほど厳しいものであると実感させられた。いい加減なストーリーで書いていた小説が気楽なものに思えたと同時に、このエネルギーで書いたら今度こそ本物の小説が書けそうな気がした。

課長は、八時頃帰宅してしまい。後は、残った社員と慎二だけになった。結局十時まで掛かって自分なりの答を出し、その日は帰宅することにした。残っている人に、お先に失礼しますと、小さな声で挨拶し、おう、と言う返事を背中で聞いてエレベータで下りた。

外の空気は九月中旬らしく、ひんやりしていた。昼間はまだまだ暑さを感じさせるが、夜十時だと流石に冷える。それにしても一ヶ月前までの生活を思い起こすと、天と地ほども違いがあった。八月中旬は、暑いアパートにこもってちんけな小説に四苦八苦していたのだ。

東京駅まで歩いて、山手線のホームに立った。慎二としては遅くまで働いたつもりだったが、まだまだ、宵《よい》の口らしくホームには似たような格好のつかれた顔の男と、少数の女性がいた。

――あのカップラーメンの人たちは終電までやってるんだろうな。

そう考えると何か空しくなる。あんな書類一枚に一日掛けて何になるんだ、と言う気持ちが捨てきれなかった。

電車がホームに入り、慎二も乗り込んだが、酔っぱらいに仕事の愚痴と、社会の縮図のようだった。池袋に着いて、アパートまでの道程も長く感じた。普段の時間帯だとスーパーも開いているが、この時間だとコンビニエンスストアしか開いていない。慎二はその中の一軒に入って弁当とビールを買い、アパートに帰った。

アパートの部屋の鍵を開けてドアを開けるや否や、慎二は床の上に荷物を放り出し、スーツを脱いでハンガーに掛けた。本当はその辺に放り出したい気分だったが、あいにくとスーツは裕子からの借り物で、新しいのを買うまでは粗末には扱えなかった。

部屋着に着替えて、ちゃぶ台の上に弁当を置き遅くなってしまった夕食をビールを飲みながら口にした。ちゃぶ台の上には書きかけの原稿用紙。慎二は箸の先でページをめくってみた。早く書かなきゃと思うが、箸は動けどペンは動かない。今日のデスクワークで脳みその随まで疲れ切ってしまったかのようだった。サラリーマンをしながらの執筆作業ってものすごく大変なことだと、今日一日頑張ったせいで、つくづく実感させられた。でも、多くの売れっ子作家達は最初のうちは皆、兼業作家だったのだ。自分にそんな生活スタイルが貫けるのか？　今日起こったことを思い起こすと、とてもではないが無理だと思った。

畳みの上にごろんと寝ころぶと、一気に眠気が回ってきた。そしてこっくりこっくりと居眠りを始めた。

11.

11.

　不意にスマホが鳴った。慎二は眠りを妨げられて、うるさそうにそれを取った。裕子からと思ったのだ。目をこらして画面の表示を見ると知らない番号からだった。
「はい。杉原ですが」
「あ、夜分すみません。和田ですぅ、迷惑でした？」
「い、いえ、全然。何か忘れ物ですか？」
「いえ、今日初めての勤務だったから疲れたんじゃないのかなって思ったから電話したんです」
　――何かいい子だな。
「いえ、そんなこと。和田さんが色々教えてくれるから助かりました」
「まあ、うれしい。じゃあ、週末どこかに行きませんか？」
「そうだね。いいですよ」
「じゃあ、絶対ですよ」
　慎二の顔はにやけていた。一流会社のサラリーマンともなるとこれだけ持てるのかと変な勘違いを犯してしまう。
　だが、その勘違いのお陰で気持ちよい睡眠を取ることが出来た。
　朝、裕子からの電話で目が覚めた。昨日の勤務初日の感想を聞くためだった。
「やっぱり大変でしょう？　　サラリーマン生活って」
「初日から、あれだからな。これで一ヶ月持つかな」
「持たせるのよ。辞めたら承知しないからね」
「わかったよ。それから、少し都合してくれないかな」
「何よ、彼女でも出来たの？」
「おいおい、変なこと言うなよ。丸の内で生活すると結構金がかかるんだよ」
「よく解らないけど生活費ね？　　じゃあ慎二君の給与口座に振り込んでおいてあげる」
「すまんな」

　慎二はそう言って、裕子から金を借りた。週末に美紀と映画でも見に行くつもりだった。電話のせいで遅刻せずに済んだが、余裕がなくなった。あわててアパートを飛び出し、池袋駅目がけて走っていった。
　オフィスに着くと、課長はすでに来ていて机の上の受け箱の書類を整理していた。慎二も座って、仕事の準備を始めていると、和田美紀が出社してきて、にっこり笑って慎二の前の席に着いた。
「おはようございます」
「おはようございます。昨日はごめんなさい」

「いや、ところで週末ですが.....」
　そう言うと、美紀は口に手を当て、しーっと口止めした。職場では秘密なのだ。
　そんなことをしていると早速、課長に呼ばれた。
「杉原君、ちょっと」
「はい」
　慎二は課長の机の前に立った。
「昨日の書類だが、論点がボケている。大阪印刷所の段階的撤退はまあいいとして、その理由に社会的背景、景気の衰退と言った外部要因と、印刷所内の工夫が足りないと言う内部要因を二つあげている。こんなもの出せば怒られるぞ、わかるか？」
「いいえ」
「正直に答えるな。せめて考えるふりをしろ。あのな、印刷所内の工夫が足りないなら企画課で対処可能だろう？　　そう言われる。対処は出来るのか？」
「いえ」
「だったらそう言う表現をするな。いいな、それだけ直して十時までに出せ。それが終わったら次の課題を指示する」
　――まだあるのか？
　慎二はうんざりだったが、課題の克服そのものが仕事なのだ。これがなくなるときは解雇されるときか、会社がなくなるときかのいずれしかない。渋々といった表情で慎二は席に戻った。美紀が楽しそうに慎二の姿を眺めていた。
　慎二は言われたとおり、表現を見直して報告書を提出した。
「ご苦労さん。これで部長室にまわしておく」
　課長はそう言って、決裁印を押した。
「それから、次の課題だが、半導体メーカーから当社に次世代チップの製造に関する検討依頼が来ている。先方と打ち合わせがあるから、午後一時に新宿の日本セミコンダクターに行く。君は電子工学に興味はあるかい？」
「新聞に出ている程度です」
「それはいかん。ちゃんと勉強するように」
「あの、わたし一人で行くんですか？」
「そこまで期待していない。技術部の大西担当部長とわたしも行く。だが、意見を求められたら子供みたいな回答はするなよ」
「はぁ」

　また、慎二はとぼとぼと席に戻った。美紀が興味深げに聞いてきた。
「ねえ、何だったんですか？」
「昼からの打ち合わせに俺も出るよう言われたんですよ。半導体なんて専門外なんですけどね」
「へぇえ。かっこいい！　　杉原さんてきっと優秀なんですね」
　――訳の分からないことを言わないでくれ。
「そう見えますか？」
「あたしがこの職場に入ったのは三ヶ月前からなので、あんまりここの仕事のことはよく

知らないんです」
「ああ、企画課の業務ということですか。前は何をしていたんですか？」
「あたし、派遣社員だから……」
「そうだったのですね」
　そうは言われても、慎二もサラリーマンの経験がないので、正社員と派遣社員の違いも、職務内容の違いも、この時点ではよく理解出来ないでいた。彼女は続けた。
「ここの課の人たちって無愛想な人ばかりじゃないですか？　コピーとって、デスクまで届けても反応ないし、出張の切符を手配してもお礼も言わないし。まあ仕事だからしょうがないんですけど……人並みに相手してくれるのは杉原さんが初めてだったんです」
「そうだったんですか？　それは酷いなあ」

　昼休みに慎二は早めに食事を取りに行こうと、席を立つと美紀がついてきた。
「一緒に行ってもいいですか？」
「いいけど、時間がないからここの食堂ですよ」
「ご一緒します！」
　嬉しそうについてきた。食堂では美紀はそば定食を選び、慎二の分のお茶まで入れてくれた。楽しそうに、空いているテーブルを見つけると慎二の正面に座った。
「えへ、昼から頑張って下さいね。課長はうるさい人だけど悪い人じゃないから」
「あれ、美紀ちゃんにもうるさいの？」
「はい。コピーのコピーは一つ濃度を上げるとか、ホチキスは左上、紙と水平に、とか」
「ぷっ。あの人らしいですね」
「あの、杉原さん講立大学なんですか？」
「そうだけど、君は？」
「あたしは短大です。それでこの会社の管理部門のえらい人って講立大学出身の人が多いじゃないですか？　杉原さんも幹部候補なんですか？」
「そんなんじゃないですよ。無職だったから知り合いのつてで入れてもらっただけでしてね。今も試用期間だからやたら試験めいたことをやらされてるんですよ」
「ふうん。そうだったんですね」
　美紀は上品にそばを口紅につけないように食べていた。そんな、美紀を見て慎二は裕子と比較した。裕子は比較的豪快に食べる。化粧など後から直せばいいと言う考え方だ。見掛けはどちらも育ちが良さそうだが、性格はまるで違っていた。
　慎二は食事が終わると、美紀の入れてくれたお茶で口をすすぎ、先に行くと言って立ち上がった。
「杉原さん。それ癖ですか？」
「何が？」
「お茶で口をすすぐのやめた方がいいですよ」
「みっともないと？」
「そうじゃないですけど、女性の前ではエチケットです」
　こういう言い方でも裕子なら頭ごなしだが、美紀は女性の前でのエチケットと、オブラートにくるんだ言い方をした。どうせお腹に流し込むのだ。食後に歯磨きをするにし

ても、こっちの方が合理的じゃないか。そんな気がする。でも、他人の行為だからこそ気になることもあるのだろう。

12.

12.

慎二は、自分の席に戻り相手の会社の資料を読みかけると、課長が、行くぞと声を掛けた。慎二は腕時計に目をやった。
「少し、早いんじゃないですか？」
「俺たちだけならギリギリでいいが、正面玄関で、大西担当部長を待たせたらまずいだろう」
担当部長とは管理職ではないが部長職を退いた後、技術的ノウハウを持っているために、部長待遇で部長室にいる人である。対外的には部長なのでいざというとき都合のいい存在でもあるらしかった。
慎二と課長がエレベーターで下に降りると、まだ大西担当部長は来ていなかった。時計を見ると十二時四十分だ。
「多分、四十五分くらいだろうな」
「いつもそうなんですか？」
「行き先によるよ」
「そうですね」
「ああ、タクシーで行くけど、君は助手席ね」
「はい、分かってます」
「タクシーチケットを渡しておこう。普段は庶務の和田君が持ってるからね。課長の許可がいることになってるから、今度一人で行くときは早めに言いなさい」
「はい」
慎二は往復二枚のチケットを預かり、背広の内ポケットに入れた。十二時四十五分きっかりに大西担当部長が現れた。
「やあ、渡辺君と新人君。遅れて済まない」
「いえ、じゃあ行きましょうか」
慎二が会社の前に何台か並んでいるタクシーの運転手に新宿の日本セミコンダクター社に行くよう伝えた。二人が後部座席に乗り込むのを見て、慎二は助手席に乗り込みシートベルトをした。
「じゃあ、行って下さい」
タクシーは走り出し、十五分くらいで到着した。慎二がチケットを渡し、先に降り、ドアを手で支えた。
「ありがとう」
と、大西担当部長が後から降りた。先方の総務課長がロビーで待っていたようで、課長と挨拶していた。慎二たち三人はそのまま応接室に通された。席順もこういう場合決

まっている。こちらは受注予定側なので下座に着かなければならないが、総務課長は強引に慎二たちを上座の奥側に座らせた。
　総務課長が内線で、コーヒーを持ってくるよう注文し、それから、設計課長と担当者に来るよう連絡していた。
　しばらくすると、設計課長と担当者が来て、大西担当部長と課長は顔見知りなので挨拶だけして、慎二は初めての名刺交換をした。座ってしばらく、大西担当部長が雑談していると総務課の女性が人数分のコーヒーを持ってきた。
　慎二はきれいな子だなと名札を見た。総務課長は彼女と一緒に引き上げた。この後、設計課長が本題に入った。
「大西さん。以前打診した、次世代半導体の製造なんですが.....」
「ああ、あれですな」
大西担当部長は言葉を濁した。あらかじめ技術部に何らかの打診があった様に思われた。
「もう長いこと一緒に仕事をしてきた仲じゃないですか。特注ＩＣでの展開を考えています」
　お客の設計課長はそういった。
　慎二は話に付いていけなかった。ぼけっとしていると、大西担当部長が続けた。
「三次元で回路を組もうというプロジェクトでしたね。あんな高精細な回路でやるなんて現在の技術では、ちょっとどうなのでしょうな」
「は？」慎司はぽかんと口を開けた。
「それですよ。何とかなりませんかねえ」と、先方の課長は合いの手を入れた。
「ああ、そうですな。パターンのサイズは２ナノメートルでしたか」
「それで、何層にも重ねて、立体的な回路でＩＣチップを作りたいのですよ。可能ですよね？」
「ううむ、まだ、高精細技術は発展途上の道半ばと言った所ですからねえ」と、渡辺課長はあごをさすった。
「まあ、一度持ち帰り、検討させてくださいな。早い内にお答えできると思います」
　大西担当部長は言葉を濁した。実際に、立体的な回路になれば、集積度は一気に上がることは、先方の熱意からも受け取ることが出来た。
　慎二には完全に別の世界の話になりつつあった。だが、ここで会談は終わってしまった。

「それはそうと、御社の保養所でゴルフコースの付いたものが出来たそうじゃないですか？」
　大西部長は、もう、仕事のことには関心がないみたいな言い方で、話題を切り替えた。
「ええ、大西部長も一度ご利用になりますか？　　特別にご招待しますよ」
「是非お願いしたいですねえ」
「じゃあ、大西さん。今日はこの辺で」
　と、会議は終わった。
　課長は、皆がいなくなった後、大西担当部長に尋ねた。

「担当部長。技術的には可能なんですね？」
「少し開発期間がいると思う。これまでの延長線ではないから。こちらも全く新しい三次元の高精細回路の印刷技術として、大型の電子銃の開発と真空設備が必要になるかも知れない。だから、開発費用は相当高くなるだろうね」
「そうですか」
　そのまま、詳しい話はせず三人はタクシーで引き上げた。
　帰ると課長は慎二を、コーヒーに誘い、今日の話について若干の説明をした後、これを受注する方向にするのか、辞退するのか、検討すると伝えた。
「また同じ様な検討ですか？」
「同じ様に出来るのか？」課長は慎二をにらんだ。
「いえ」
「君には荷が重すぎる。榊《さかき》主任と一緒にやれ。榊には俺から言っておく」
「ありがとうございます」

　正直、慎二にはどうしてよいか、いや、何のことすら分からなかった。一緒に手伝ってくれる人と言っても、あのカップラーメンを机の引き出しに入れていた男だ。仲良くやれるとは思えない。課長の言うとおり荷が重すぎると思った。
　三時から、榊が慎二を会議机に呼び出した。早速資料を抱えてきた。
「榊です。よろしく。早速なんだけど、この案件.....君はどう処理するつもりなんだい？」
「こちらこそ、よろしくお願いいたします。あの.....全然意味すら分からないと言うのが正直なところです」
「正直な人だな。技術的には可能と、担当部長は客先には申し出ている。だから、断るなら採算の取れないような高い見積もりを出して暗に断るか、受注するならそれなりの利益見通しの立つ見解を作らなければならない。それは分かるよね？」
「はい。あの、榊さんはどう思われているんですか」
「僕？　　ああ、今の半導体の最先端は２ナノメートルの線で出来ている。問題はそんな回路を三次元で組んだとしたら放熱が問題になるし、歩留まりを気にしなくてはならないだろうということだよ」
「歩留まり？」
「生産数から、失敗作を差し引いたものだよ。正常な品物が出来ないと歩留まりが悪くなると言うんだ」
「なるほど」

　榊は続けた。
「半導体は四年で二倍の容量に進化する業界だ。だから、２ナノメートルの回路を組んでも、他社が追随してくるから、短期的利益しか見込めない、どうしてもっと細かな１ナノメートルで受けなかったのか文句を言いたいところだ。投資をしても利益は見込めないよ。三次元化するだけでは、回路の密度は.....ああ、密度だけはあがるよね。実行速度は保証できないが.....」
「でも、この技術がないと次世代どころか、それ以降の進歩も止まってしまうんですよね」

「それは、営業の考えることだ。僕たちが決める事じゃない」

慎二は黙り込んだ。要するにこの部署の仕事は戦略的に有効かどうかを判定することで、義理で受注するなら営業判断、技術的に判断するのは技術部と、この割り切りように付いていけない気がした。

慎二は榊にもらった資料をつけて、その様に書き上げ夜の十時に課長の受け箱に放り込み、帰宅の途に付いた。電車の中で愚痴をこぼすサラリーマンの気持ちが分かる気がした。

アパートにたどり着くと、ビールを飲んでシャワーを浴びて寝てしまった。

13.

13.

　朝早く目が覚め、慎二はぼんやりと、こんなことしてていいのかなと言う漠然とした不安にさいなまれていた。ちゃぶ台の上の原稿も放置したままだ。
　その日会社に行くと、書類はもう決裁されて、部長室に送られそのコピーが担当の榊と慎二の受け箱に入れられていた。
　――今度は文句なしなのかな？
　慎二がその書類を見ると、最初に書いたものから大幅に変更されていた。
「これまでの先方との取引を重視し、受注を目指すことを大前提に考える。但し回路密度の２ナノメートルは、数年の技術的アドバンテージしか見込めないため、当社独自に１．５ナノメートル技術を開発する。高精細回路を印刷するのに新型電子銃を開発する必要もあり、費用回収に相当量の受注を見込まなければならないことを特記しておく。本件は大西担当部長殿に連絡済み」
　そんなコメントに変わっていた。

　慎二は榊に文句を言おうと思ったが、助けてもらっておいて文句を言うのも筋違いかと思いやめた。悔しいが自分の得意分野ではない。この部署では自分の能力など発揮できない。そう思った。
　課長からは、相変わらず検討案件の書類を渡される。慎二はそのたび、榊にアドバイスを求めながら、難を逃れやっと週末を迎えた。
　金曜日の終業時間を過ぎると、美紀が慎二を誘った。
「あの。定時後にお食事に行きませんか？」
「え？　　ああ、いいですけど」
　慎二は特に用事がないことを確かめ、美紀と食事に出かけた。電車で少し移動して赤坂のイタリアンの店だった。美紀が前から探していた店らしかった。
「会社の女の子って、こういうところによく来るんですか？」
「よくってほどじゃないですけど、おしゃれなお店を発見するのが趣味って子は多いですよ。せっかく東京で働いているんです。色んな刺激を受けたいではないですか」
「そうなんだ、お酒も？」
「美味しくて、結構飲んじゃうんです。って言っても、男の人ほどじゃないんですけれど」
「俺、小説を書いているんですよ」
　慎二はわずかに口を湿らせた程度のワインで少し気が大きくなり、自分の妄想を大胆に述べた。美紀は一瞬きょとんとした顔になり、そして笑顔になった。
「へぇ！　　すごいですね。本になったりとかするんですか？」
「いや、文芸誌の新人賞にも通ったことがない」

「でも、いいですよね。そう言う高尚な趣味を持ってる人って」
　――裕子とは正反対のことを言うと思った。
「仕事辞めて執筆に専念すると言ったら、どう思います？」
　酔っているのかという感じで、彼女は慎二の目をのぞき込んだ。
「えぇーっ！　ここを辞めるんですか？　もったいない」
「そうですよね。そんなことね。ないですよね。あはは」
「あはは」
　と、美紀は微笑んで、右手の甲を口元によせた。

　慎二は彼女にしても、一流企業の正社員になったから付き合ってくれているんだと、改めて思った。無職で小説家志望の男など、普通だったら見向きもしないだろう。それを考えるとこの仕事を辞めるのも躊躇《ちゅうちょ》された。こんな美人に食事に誘われるなんて、この長い人生の中でなかったことだ。もっとも、裕子は別である。
　食事の後、横浜まで帰る美紀を新橋駅まで送って、慎二はそのまま、山手線で池袋まで帰った。また、とぼとぼとアパートまでの道程を歩いた。

　歩いている間、この一週間にあったことと、それまでやって来たことなど、色んな思いが頭の中に蘇り、それらについて、いちいち深く考えに及んだ。まだ、小説家になる道を捨てた訳ではない。仕事は仕事として続けなければならないのだろうが、原稿もちゃんと仕上げていかなければならないのだ。兼業作家は、実際やってみて想像以上にキツい仕事だと改めて感じさせられた。
　アパートに戻り、アルコールを抜くために水をがぶがぶと飲んでちゃぶ台の前に座った。
　長らく中断していた執筆を再開しなければならない。この週末、土曜日曜を時間に充てる気でいた。しかし、疲れがたまっていたのか、金曜の夜はそのまま机に突っ伏したまま眠り込んでしまい、土曜日の午前十一時に裕子が遊びに来るまで気付かなかった。

14.

14.

　アパートの廊下にハイヒールの足音が響き、そのままドアが開けられた。裕子が部屋をのぞき込んだ。
「あら、寝てるの？」
　と、玄関先からごろ寝をしている慎二に声を掛けた。
「お、いかんいかん。今何時だ？」
「十一時よ、……でも土曜日だよ。遅刻じゃないからね」
　――そんな心配はしていない。
「何しに来たんだい？」
「何って事はないでしょう。人からお金を借りておいて。せっかくの土曜日だし、どこか行きましょうよ」
「しょうがないな」
　泣きそうな顔で慎二は服を着替えた。
「ちょっと。そんな情けない顔しなくてもいいじゃない」
「原稿が止まってるんだ」
「まだ、諦めないの？」
「うん」
「まあ、きちんと仕事してるなら週末何しようが文句言わないけど。この一週間どうだった？」
「自分の無能さをじっくりと味わわされた」
「何よそれ。新人がベテラン並みに仕事させてもらえるわけないじゃない」
「そうじゃないよ。社会常識や物事の判断。それら全て俺に欠けている」
「まあ、完全に自信喪失？」
「ああ」
「何でだろ。みんなが通る関門なのに。慎二君だけが感受性が強いのかな」
「ふざけるな。出す書類、出す書類、全部課長に文句の山をつけて突き返されるし、夜中に出したやつを先輩社員が適当に直しておいてくれるし、要するに俺の存在価値がないどころか、マイナスじゃないか」
「だからぁ、新入社員てそんなものなのよ。くよくよしないで美味しいものでも食べに行きましょうよ。みんなが通る道だよ。慎二君の社会参加が遅かっただけよ。気にしない、気にしない！」

裕子の圧力に負け、とぼとぼと慎二は付いて歩いた。街まで出ておしゃれな店に入ったが、慎二は余り食欲がなかった。裕子の方は元気満々で食い気もたっぷりだ。
「慎二君、本当に食べないのね。もしかしてノイローゼ気味？」
「かもな」
それ以上の会話は弾まなかった。近くの公園を散歩し、ベンチに腰掛けたとき慎二は裕子の唇を奪おうとしたが、あっさり拒絶された。慎二もそれ以上求めようとせず、そのままそこで別れた。

日曜日、慎二は今後のことを考え、会社を辞める方向で決心した。
――裕子怒るだろうな。
だが、慎二の精神はこれ以上耐えられそうになかった。
月曜日、慎二は課長にそのことを伝えた。
「辞めてどうするんだ？」
「やはり、バイトをしながら小説家を目指します」
「お前.....。この一週間考えることを学ばせたつもりだったが、その結果がそれか？」
「はい」
課長は何か言いたげだったが、辞める奴に時間を掛けるのは惜しいらしく、それ以上は言わなかった。
「退職届は専用の用紙があるから、これに名前を書いて判子を押すだけだ。初任給もまだだし、一週間しか在籍していないから、経理関係はあまりないと思うが、年金や雇用保険の会社立て替え分があるから、一週間後に経理課に行きなさい。ここの用件はその用紙だけだ」
慎二はその場で名前を書き、判子を押した。

玄関のところで午前中外出していた和田美紀に出会った。
「あら、お出かけですか？」
「辞めるんだ。さよなら」
「え、冗談ですよね？」
「本気だよ。俺には勤まらない。じゃあ」
呆然とする美紀を後にして、慎二は駅に向かった。

電車の中で、やっと区切りが付いたような気がした。やはりニートにはニートな生活しかできない。後は小説を軌道に乗せるだけだ。前のように意気軒昂《いきけんこう》ではなくなってしまったが、望みはあった。自由な時間が増える。ただそれだけである。
ニートに戻ってからは、慎二はまた執筆を再開した。
相変わらず、万年筆を握りしめ原稿用紙とにらめっこが続く。前に書きかけて止めた、蔵の中と言う小説の続きを完結させようとしたのだ。

夕方になり食事の支度をしていると、裕子が遊びに来た。土曜日、様子がおかしかったので見に来たのだろう。
「あら、今日は休暇？」
――試用期間の奴が休暇を取れるわけがない。
「辞めたんだ」
「ちょっと。冗談よしてよ」
「冗談じゃない。本気だ」
「もう、あたしがどんな思いで今まで慎二君の為に動いてきたか分かってるの？」
「余計なお世話だ」
「何よ、それ！」
裕子が涙目になってきた。
「あのさ、今ね、隣の部署の男の人から交際を申し込まれているの」
「ふん」
「あたしが、どうしてその人のこと今まで断ってたのか知ってる？」
「俺に気があるのか？」
「馬っ鹿じゃないの！　慎二君学生時代にあたしのこと泊めたでしょう！」
「コンパで酔い潰れて俺のアパートに運び込まれただけじゃないか」
「そんな問題じゃないわ！」
「なら、今まで何で黙ってたんだよ！」
「酔っぱらって男の家に泊まり込んだなんて、人に知られたら馬鹿だと思われるじゃない。しかも、大事なともだちはみんなそのこと知っているんだよ。あたしはあなたと、ずっと付き合っていると思われてるの。唯一あたしのプライドを守るには、あんたが一流会社の優秀な社員になって、あたしを嫁に迎えに来ること。それしかないから今まで頑張ってきたんじゃない。何にもわかってないし、わかろうともしなかったね！」
「また、プライドかよ」
「プライドのない人間なんていないわ」
裕子は怒ってそのまま出て行ってしまった。アパートの階段を甲高い音を立てて降りていく。だが、慎二は後を追わなかった。
夜になって、裕子のスマホに掛けてみたが、彼女は出なかった。
「くそっ」
慎二はスマホを床の上に投げ出した。なんだかんだ言っても裕子のことが好きなのだ。

15.

15.

九月二十五日、裕子との連絡が取れないままに、慎二は小説を完成させ、郵便局から発送した。帰りの足で書店に寄ってみると、月刊文芸が発売されていた。慎二の希望的観測では、四月に応募した作品が一次選考を通過しているはずだった。

一冊手に取り、パラパラと最後の方にある文学賞のページをめくった。八五六通の応募に対し一次選考作品五〇作となっている。慎二はその五〇作品のタイトルと名前を目で追っていった。杉原、杉原.....。

「あれ、次のページかな？」

だが、次のページはなかった。そこは別の記事だった。慎二はもう一度最初から、目で追った。だが、杉原慎二の名前はどこにもなかった。

「おいおい、冗談じゃない。あれは自信作だったんだ。傑作だったんだ」

書店の店員が不審そうな目で慎二を見た。ぶつぶつ言っているのだからおかしいと言えばおかしい。

また、とぼとぼとアパートに帰った。

机の前にどっかと座り、さっき発送した作品のコピーをパラパラと力なくめくった。これもレベルは同じくらいだ。あれが駄目ならこれも駄目だろう。一気に鬱《うつ》状態に陥った。

ぼうっと惚けていると、玄関でピンポーンと呼び鈴が鳴った。

――裕子かな？

そんな訳がなかったが、今の慎二には何らかの救いが欲しかった。裕子を抱けば立ち直れる、そんな錯覚が頭をよぎる。

ドアを開けると、電気代の集金だった。

慎二の財政状況はかなり悪かった。電気代は何とか支払ったが、まだ水道代や家賃もある。貯金はすでに枯渇しつつあるので、また、アルバイトを再開しなければなと思い出した。

しかし、今の心境では、そんな気にはなれなかった。裕子の事も忘れられないし、小説の道が閉ざされた今、やはり、サラリーマンを続けていれば、裕子でも美紀でもいくらでもつきあってもらえただろう。

それに、自信作だったのが一次選考ではねられたのだ、今の慎二にはあれ以上の作品を書く自信も、もはやなかった。やけになり愛用の万年筆を力任せに折った。中のインクがぱあっと辺りに散らばり、壁にもいくつか黒い染みが出来た。

――もう書けないや。

夕方から慎二はなけなしの財産をサイフに入れて、駅前の居酒屋に飲みに出かけた。やけっぱちな気分だった。

――筆を折るとはまさにこのことだな。

月刊文芸の一次選考に落ちたことで完全にやる気を失っていた。

16.

16.

居酒屋に行くと、もうすでに仕事を早めに切り上げたサラリーマンや学生が飲んでいた。多分近くにある講立大学の学生だろうと思ったが、慎二は騒ぐ気分ではなかったので、隅っこのカウンターに座り、ビールを飲んだ後、焼酎をちびちび飲んだ。いや、このペースだと、ぐいぐいと言った表現がふさわしいかも知れない。

一時間ほど焼酎を飲んで、肘をつこうとしたとき慎二はバランスを崩し隣の人の肩にぶつかった。

隣に座った老人が、慎二の身体を支えて元の椅子に戻してくれた。

「おい、若いの。余り無理すると肝臓を壊すぞ」

慎二が見上げると、日に焼けた顔と筋肉質の体つきをした精悍《せいかん》な老人だった。年齢は七十代くらいだろうか。慎二より精力がありそうな感じだが、はげかかった頭髪と残りの髪の白さが唯一年齢を感じさせた。酔っていなければ慎二が近づかないタイプの人種だ。自信たっぷりの、硬骨親父。慎二みたいな軟弱物はどやされてしまいそうだ。

「いいんですよ、どうなっても。誰も心配しないし。どうせ、この世の中に用のない人間です」

「どうした？　女にでも振られたか」

老人は興味深げに訊ねた。

「女に振られ、仕事を辞め、作家志望だったんだけど書けなくなって、後は酒を飲んでその辺でのたれ死にするしかないんですよ」

「まあ、苦労って常に報われるものじゃないさ。むしろ無駄の方が多い。それが人生ってもんだよ。若いの」

「おじさんは、学校の先生ですか？」

「そんな立派なものじゃない。魚を釣り上げるしか能のない男だ」

「へえ、でも何か一つ能があればいいじゃないですか。それだけあればプライドが守れる。そうしたら生きていける」

慎二は裕子を怒らせたことを思い出した。彼女には彼女のプライドがあり、慎二には慎二の引きこもりなりのプライドがあった。もっとも、慎二のプライドは数時間前の文芸誌の発表欄でズタズタになっていたが。

「ほう、いいことを言うな。若いの。折角《せっかく》だから君の無能ぶりを発揮してみないかね？」

「どんな仕事です？」

「わしの下で働いてもらいたい。若い衆《しゅ》がいないんだ」

「え、会社でもしてるんですか」
　――そんなものなら慎二はうんざりだった。
「会社じゃない。でも、会社みたいなものかな。船を出して魚を釣り上げる」
「漁業ですか」
「お、目が輝いてきたな。若いの」

　慎二は、酔っていたしこの先の人生の目標を失ってしまっていた。どうせしばらくはコンビニでアルバイトさせてもらわなければならない。
「あの、給料は出るんですか？」
「ああ、安いがな」
「具体的には何をするんですか？」
「釣りだよ。魚を釣り上げるの。俺、漁船を持ってるからさ。明日美崎《みさき》まで行く？」
　慎二は、余り先のことを考えていなかった、即座にＯＫし、老人のバンでそのまま美崎に連れられ、大勢の乗組員らしき人が泊まっている宿に泊めてもらった。

　朝になり、美崎漁港を母港とする、第五十六幸福丸、三二〇トンの船長だと知った。
「俺は木原淳三《じゅんぞう》、六十三歳だ。船長兼・漁労長《ぎょろうちょう》。他の乗組員は君以外全員外国人だ。英語は通じるから大丈夫だろう」
　慎二も酔った勢いとはいえ、断れない雰囲気を醸し出していた。
「あの、何週間くらい漁に出るんです？」
「半年から八ヶ月だ。オーストラリア沖合の南太平洋まで進出する」
　慎二は訳が分からなかったが、船に乗り込み早速鍛えられた。縄の結び方など基本的なことを、どこの国の人間か分からないがアジア系の青年に教わっているうちに、船は出航準備が出来たらしく、ディーゼルエンジンの音が響きわたった。

　船が岸壁を離れ、やがて海しか見えなくなっても、あまり心配はなかった。もう失うものなどない。そんな意識が新たな世界へ入っていく手助けをすることもある。慎二は自分でも不思議だった。船長の木原に呼ばれ、ブリッジらしきところに上がった。
「おう慎二、これ分かるか？」
　船長は、船に積んである計器類を指した。液晶画面にレーダー画像やその他のきれいな模様が浮かんでいるし、数値の羅列もあった。
　慎二は首を横に振った。
「ＧＰＳシステムだ。衛星を利用して船の現在位置を確認する。こっちはレーダーだ。もっとも小型船のレーダーは余り当てにならない、わかるか？」
「いいえ」
「レーダーは電波を発射して反射波を受け取りここに映し出す。地球は丸いから、水平線の向こうは映らないんだ。わかるよな？」

「はい、でも自衛隊とか高性能レーダーとか言ってますが」
「あれは、航空レーダーだ。空なら映るだろ。水平線の向こうは見えないんだ。もっとも空母なら地上から七〇メートルあるから見渡せる範囲は広いがな」
「魚群探知機もあるんですか」
「お、その気になってきたな。これがそうだ。但し慣れないとどれが、魚群かは分からないがな。すぐには無理だ」

17.

17.

船は二週間ほど掛けて南下し、その間慎二は、グエン・ミン・チャットと言うアジア系青年に教わりながら、延縄《はえなわ》への餌となるイカやサバの付け方などを教わった。

「おい、グエン。いつから漁をするんだ？」

「もっと南だ」

――船長の話ではハワイとグアムの中間辺りで漁をしていると言っていた。あまりアメリカに近づくと、アメリカ漁船に邪魔をされる。やつらは三千トン近い船を使うから、この第五十六幸福丸、三二〇トンでは太刀打ちできないらしかった。

幸福丸のディーゼルエンジンは快調な音を立てて船体を前進させている。だが、このディーゼルの振動で慎二は船酔いにかかりしばらく食事が出来なくなった。

グエンがときどき水を持ってきてくれた。

「いらないよ」

「何か胃に入れないと吐けない」

「それもそうか。ありがとう」

慎二は水を飲んでは吐き、吐くと小魚が寄ってくる。しばらくは小魚の餌係になってしまった、とグエンはからかった。それまでは、ベトナム人のフアンと言うコックが作る料理を食べていた。野菜が食べられるのは出航後しばらくだけで、後は冷凍庫の食材と、漁に使うイカが少しだけ使えるだけと言っていた。もっとも冷凍食品でも最近は野菜チップがあるので、昔ほどビタミンには不足しないらしかった。

緯度が下がるにつれ、太陽の日射量が多くなってきた。甲板で寝ころぶと本当に干物になってしまいそうになる。そろそろ、船長兼漁労長の考えている漁場に近くなり、延縄と巻き上げ機の試験を一度だけ行うことになった。乗組員の訓練も兼ねて実際に、ここで網を出して餌となるサバを捕ることになった。

「おい、慎二。出番だ。がんばれよ」

船長は発破を掛けた。船酔いで吐くだけ吐いて太陽の光で干物になったお陰で、慎二の精神状態も上向いていた。いつまでもくよくよとはしていられない。

「二週間の航海で大分、男らしくなったな」

「元々ですよ」

そう言って、船尾から網を出す乗組員達の仲間に入った。皆母国語で喋り、必要なときだけ英語の単語を並べる。グローバルな社会だった。

一時間ほど掛けて網を流し、また、巻き取り機で巻き取る。多くはなかったがまるまると肥えたサバが掛かっていた。焼いて食べられそうなやつは、より分けて冷凍庫行きだ。慎二とグエンがその仕事をさせられるが、別に嫌とは思わなかった。船の上では人手は限られている、仕事の選り好みなどしている余裕はないのだ。

船長が慎二を呼びつけた。

「おい、間もなく公海上に掛かる。自由に獲っていい海だ」

ＧＰＳはこの船の位置を正確に示していた。この海域での主な獲物はビンチョウマグロだと船長は言った。

「船の位置を必ず確かめること。いざ事故や拿捕《だほ》のときに問題になる。他国のＥＥＺ（排他的経済水域）で操業などもってのほかだ。漁師になるなら覚えておけ」

慎二はまだ、漁師になる決心も何もなかったので返事はしなかったが、この船長が自分を跡継ぎの様に扱うのも困った。

「あの、船長。聞いていいですか？」

「何だ」

「美崎に母港を持つお人が何で池袋の安酒場で飲んでたんですか？」

「ふん、俺の自由だ。.....あの近くに娘の嫁ぎ先があるんだ。娘はどうでもいいんだが孫の顔を見ておきたくてな。この船が拿捕されたり、沈没したりしたらもう会えないだろう。慎二こそ、会っておきたい人はいなかったのか？」

「いや、別に」

――裕子には会いたかったが、電話にすら出てもらえなかった。

ブリッジで乗組員の作業を見ている船長の目に後顧の憂いなどみじんも感じられなかった。この人に迷いなどない。だから、多くの日本船が撤退する中、東南アジアから労働者を募ってまで操業しているのだ。

慎二がブリッジから見るとサバの仕分けと、網の巻き上げはそろそろ終了近くなっていた。明日から、本格的に延縄漁に掛かるのだ。

「慎二。明日は三時起きだ。いいか」

「早いんですね」

「早くから仕掛けないと終わらないぞ」

「わかりました」

夕方、ファンのベトナム料理を皆が平らげた後、船長は漁労長に変わって、明日からの漁のスケジュールを説明した。これまでの航海とシフトが変わり早朝労働での漁と、午後からは仕掛けの手入れと、冷凍庫の中の整理がある。その代わり夕方には就寝時間となる。見張りを残して休養を取るのだ。見張りの順番はくじ引きで決められた。

慎二はこの晩、胸が高鳴って眠れなかった。マグロってどんな魚だろうとか、素朴な疑問とまだ見ぬ獲物に対する恐れ、浮標《ブイ》と一緒に海に落ちないか、そう言った漠然《ばくぜん》とした不安にさいなまれた。文学賞応募作品を郵便局に持って行くときの胸の高鳴りと似ていたのかも知れない。

早朝三時、慎二は他の乗組員達と共にたたき起こされ、ゴムの作業着を着て甲板に集合した。漁労長の号令で一斉に準備に掛かった。もうすでに漁場のポイントは確認してあるかも知れないと慎二は思った。

慎二は延縄につける鉤に餌のサバを取り付ける係だった。鉄筋ほどもある鉤《かぎ》にサバを差し込んで行く。差し込んだ鉤は、二〇メートルの枝縄《えだなわ》で幹縄《みきなわ》につながり、幹縄は三〇〇メートル置きに浮標《ブイ》がつけられ、総延長一五〇キロメートルにも及ぶ。この投げ縄と呼ばれる仕掛ける作業には約六時間掛かり、一時間、海中に放置し、その後すぐに揚縄《あげなわ》と呼ぶ引き上げ作業に掛かる。今度は放り込むだけではなく、掛かった獲物を鉤から外す作業もあり、十五時間がかりの大仕事だ。幹縄の巻き上げには機械式巻き上げ機が使われるが、いずれにしろ慎二がこれまで体験したことのない重労働だった。

幹縄を揚げ始めて五時間ほどした頃、予想外の獲物があった。体長二メートルのクロマグロだ。甲板上でビクビクはねるマグロに慎二は引き寄せられた。真っ黒に光る魚身としなやかなその動き。だが、しなやかそうに見えて弾力のあるその身は、触れようとした慎二の体重など軽くはじき飛ばした。乗組員は笑ったが、グエンが慎二の手を取り起こしてくれた。

「これはボーナスだ、値がいい」

そう言って棍棒《こんぼう》でマグロの頭を殴り失神させ、内臓を取り出し、血抜きをした後、冷凍庫へ運んだ。慎二は呆然と見ていた。

「暴れると、身の鮮度が落ちるんだ。だから殴って失神させる」

クロマグロの誇りに満ちた反撃、自分を支えてくれた裕子に何のお返しも出来ず、期待を裏切り続けた慎二を思いっきり軽蔑《けいべつ》したに違いない。その誇りと生命力に圧倒された。

――俺は今まで何をしていたんだ。好きな女性には、何のお返しも出来ず、結局傷付けただけで別れてしまった。好きな小説も一次審査に落ちただけでペンを折るなんて、情けなかった。

「おい、慎二。何をしている。獲物が掛かっているぞ」

グエンに言われて鉤を見ると、ビンチョウマグロの他にもサンマやブリなど色んなものが掛かっていた。だが、総延長一五〇キロメートルの戦果としては貧弱だ。まだ、この作業を明日の早朝から繰り返すと言った。

「いつまで続けるんだ？」

「この船は三二〇トンだ。三二〇トン積むまでは沈まない」グエンは答えた。

「冗談はよせ」

喋りながらも慎二の身体は自然に動き、獲物の選別を自分の手で行った。途中交代して、食堂に食事を取りに言ったが、最近は食欲も増していた。

この後、約三か月で、第五十六幸福丸の冷凍倉庫は一杯になり、クロマグロ一匹とビンチョウマグロ八十匹を主な獲物として最後の巻き上げを終了した。
「幹縄収容完了。乗組員は倉庫整理のこと。本船はこれから母港の美崎港に向かう」
船長のアナウンスがあった。皆の表情が明るい。約四ヶ月の航海だが、帰れば給料がもらえるし上陸も出来る。慎二は、なるべくブリッジにいることにした。機会があれば自分の悩みを聞いて欲しかった。
「慎二、この船の跡を継がねえか？　下の娘を貰ってくれてもいいぞ」
「僕は素人ですよ。それに小説家になりたいと思ってるんです」
「何だつまらない。大の男がそんなものに一生を掛けるなよ。今だったらそのままこの船を譲ってやる」
「いえ、池袋の居酒屋で飲んでいたときは、ペンを折るつもりでした。ですが、ここでクロマグロを引っかけたとき、わたしはマグロの生命力と生きる意地に負けてはじき飛ばされました。小さなプライドを守るためだけに汲々としていた自分を情けなく思ったんです。もっと、命を懸けた作品を書かないと駄目だと.....」
「難しい話をするな」
「聞いて下さい。今までが全て、薄っぺらな人生だったんです。気が向かないと目を背けて見ないようにする。そんな態度で小説を書けるわけがない。テーマに対し全力で向き合うべきでした」
「それでお前さんどう変わるんだい」
「これからは、魂を込めた文章を書きます。薄っぺらなうわべだけの表現ではなく、心を尽くした表現を心がけます。たった一人でもいい、理解してくれる、そのたった一人の読者のために書き続けます.....」
「そうかい。何だか分からないが、美崎まで送るよ」

第五十六幸福丸が美崎港に入ると、早速水揚げが始まった。目玉はあのクロマグロだ。次の日のセリに掛けられ、船長は大金を手にした。
ここから、船のメンテナンス費用と漁具の手入れ代、そして人件費がまかなわれる。慎二もずっしりと手応えのある封筒をくれた。約四ヶ月の航海の代償として安いか高いか少しく考えるところのある慎二だったが、今回は勉強させてもらったので余り文句は言えない。グエンを見ると満足そうだった。彼らの経済観念ではそれでも大金だったようだ。
慎二が船を去るのを聞いて、グエンは引き止めた。
「また、マグロ漁に出ないのか」
「俺にはやりたいことがあるんだ」
グエンも去る者は追わずでそれ以上は引き止めなかった。

18.

18.

二月上旬、池袋のアパートに帰り、大家さんに謝って滞納していた家賃を支払い、今度は家電ショップに行き、ワープロソフトを使えるようにパソコンとプリンタを買った。

今まで応募要項を守らずに、適当な綴じ方をしていたのを全て改めた。エンドユーザは読者かも知れないが、作家にとっての第一の客は出版社の編集者なのだと認識が変わっていた。

少なくとも一週間だけだったが、考えることを学ばせてもらった日本印刷テクノロジーの課長には感謝した。

郵便受けにたまっていた手紙類を整理すると、裕子からの手紙があった。

慎二は慌てて開けてみた。

「慎二君

何度電話しても通話が出来ないので手紙にします。もう再就職の意志はないのですか？ それだけが気になります。もし、文士気取りを続けるなら、もうこれが最後の連絡です。隣の部署の男性にプロポーズされました。異議があるなら返事下さい。

十二月十日　裕子」

慎二はカレンダーを見た。もう二月十日だ。南半球にいたから季節感が狂っていたが、まだ船にいる頃に、この手紙が来たみたいだった。今からでも連絡しようと思ったが、作家を続ける意志がある以上合わせる顔がなかった。慎二は、その手紙の返事に裕子への思いを書き綴り投函した。もし、もう婚約しているならこの手紙は捨てられるだろう。

投函した瞬間、慎二の目から涙がこぼれてきて止まらなかった。

やっぱり、裕子のことが心の底から好きだったのに気づいたのだ。そして、もう手の届かないところに行ってしまった。自分にとり一番大切なのは、まさに裕子だと、彼女がいなくなって初めて意識の表層に浮かび出た。そして、その場に崩れ落ち、ぼろぼろと涙を流した。ハンカチでぬぐっても、ぬぐっても、後からどんどんと涙が出て来た。

アパートに帰った慎二はパソコンの電源を入れ、プリンタが使えるように設定を行い、執筆準備に掛かった。一番大切な裕子を失うほど……そして、その犠牲としては大きすぎるものの代償となるのが、今にして初めて感じる小説を執筆出来るありがたさだった。

船の上で、マグロに軽く飛ばされた青年の話を短編にまとめた。そして、表紙と梗概、応募要領をつけ、配送案内状を添付し、月刊文芸編集部御中として郵送した。

以前とは何もかも違っていた。出版社がお客様と思うと、今までの無礼な作品の出し方が恥ずかしく感じる。

入選はまだ出来るか分からない。だが、延縄漁《はえなわりょう》で餌を沈めるとき、マグロが掛かるのを期待しないわけではないが、掛からなくても失望したりしないことを学んだ。

慎二が学んだのはその程度だったが、クロマグロの一撃は確かに何かしらの手応えを感じさせた。

19.

19.

　徹夜明け、カタカタと慣れないパソコンに向かい原稿を打ち込んでいた慎二は小腹がすき、何か食べようとしたが冷蔵庫の中が空っぽなのに気づいた。長いことアパートの部屋を空けていたので、食べ物が何もなかった。アルバイトも船に乗る前にきっぱり辞めてしまい、今は一日のほとんどを執筆作業に当てている。当分は漁に参加することで得たお金があったが、来月半ばにはアルバイトを再開しなければ、先の生活に見通しが立たなかった。

「菓子パンでも買ってこようかな」
　慎二は財布をポケットに入れて立ち上がり、アパートの階段を下りていった。

　近所のコンビニに入ろうとし、ふと、向こうから近づいてくる人影に気づきはっと息を飲んだ。

「裕子？」
　コートを着込み首にマフラーを巻いた姿で立っていた。時刻は朝の七時過ぎ、出勤前に立ち寄ったという感じだったが、彼女には帰ってきたことを告げていなかった。そして、完全に失った希望の光と化していた。まさか、こんな自分の元に戻ってくるなどあり得ない。自分にはあまりに高貴すぎる女性だと、手紙を読んだとき、改めて実感させられていた。
　裕子の目はかなり怒っていることを伺わせた。
「慎二君。アパートに帰っていたの？　帰っていたのならどうして連絡してこないのよ？
　あたし。.....あの手紙は最後通牒を突きつけたつもりなんだけど」
　裕子のまるい頬に光るものが見えた。そしてポツリと地面に落ち、アスファルトの路面に黒い染みを描いた。
「ごめん.....おれ、やっぱり物書き辞められない」
「そうなんだ。やっぱり、もう終わりなのね」
　裕子が怖い顔で尋ねた。慎司はこの四ヶ月間のことを言い訳するしかなかったが、それより気にかかることがあった。
「裕子、結婚したんじゃなかったのか？」
　慎二がそういうと裕子は唇をぎゅっと結んだ。

「馬鹿！　四ヶ月も待たせておいて！」
「じゃあ.....あの手紙の相手は断ったのか」
「わたし、慎二君のこと信じてたんだからね」
　裕子は泣いていた。
　彼女はまだ、自分を待ってくれていた。
　その事実を確信したとき、慎司の涙腺が一気に揺るんだ。目からボロボロと涙がこぼれ落ち、頬を伝って、地面にポツポツと跡を作った。

　裕子は何も好きこのんで.....いや、自分のことが好きでいてくれたからこそ待っていてくれたのだろう。しかし、自分はその好意に甘えてばかりで何か彼女のためになることを一つでもしてやれたであろうか。そして今また、彼女の期待を裏切ろうとしているのだ。彼女に対して罪悪感めいたものが沸々と湧き上がった。こんな生き方は間違っている。断じて間違っている。本当は彼女のことが好きなのだ。心から愛している。愛している人のためにすべきこと。それはひとつしかなかった。

　慎二は涙ぐむ裕子の肩に手を触れ抱きしめようと力を込めた。
「わたしに触らないで！」
　彼女の抵抗はあのときの太平洋のクロマグロの反発を思い起こさせた。
「ご、ごめん」
「謝らないで！」
「す、すまない」
　どうしてよいかわからなかった。
　裕子はバッグの中から封筒を取り出した。
「本当にやり直す気あるの？」
　怖い目をして言った。
「何を？」
「わたし達の関係。それと仕事のこと」
「あ、ああ。でも仕事って？」
「先方にはわたしからも謝ったわ。復職することを考え直してもいいって」
「本気《まじ》で？」
「ええ」
「わかったよ。いや、このたびの船旅で心の底から感じたんだ。俺にとって本当に大事なのは小説ではなく裕子の存在そのものだったって。裕子のことが好きだ。失ってみて初めてわかったんだ。だから、もう二度と君を悲しませるようなことはしない。絶対に！」
　裕子は泣き顔になった。
　信用していいかどうか迷っている風だった。それも仕方がない。学生時代からずっと今までいい加減な人生を歩んで来たのだ。それを修正しようと努力してくれたのが裕子ただひとりだったのだ。

「俺、仕事で一人前になるまで小説をやめる。一生懸命働いて一日も早く一人前になるよう頑張る。だから、裕子。俺を一人にしないでくれ。頼む」
　裕子は、じいっと慎二の目を見つめた。
「今度は本気なの？」
「間違いない。もう二度と裕子を悲しませることはしない。絶対に約束する」」
「約束.....」
「ああ」
　慎二は裕子の肩を抱きしめた。慎二と彼女の涙がポツポツと地面に落ちた。

青年作家と第五十六幸福丸

著　　黒川 文

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社